

---

# 寵姫のおしごと

小沢出新都

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

龍姫のおじい」と

### 【Zコード】

Z03240

### 【作者名】

小沢出新都

### 【あらすじ】

今別の後宮ものを書いているけど、今のプロットじゃお茶会とかできなくて、とても後宮ものとはいえない状況で涙目だけど、書いたらには最後まで書かなきゃいけないから努力していくつもりだけど、この作品でちょっとガス抜きさせてね。な作品。

ガールズラブ的な表現があります。注意。

下品な表現が多数あります。注意。

ガールズラブ的な表現はありますが、ノーマルカプもあります。注

意。

(更新再開ですが、スローペース&不定期です。)

この世界を大きな危機が襲つた。

3大大国が一つ魔道大国ローレシアン。

賢王とかつては呼ばれしへグレアムは、禁断のグリモアの紐を解き悪魔と契約を結んだ。

悪魔の軍勢を牽きいし狂王は、世界を地獄に染めようとした。

魔の力を得たローレシアンの力は強大だった。

多くのものがただ逃げ惑い、明日に絶望した。

だが、立ち上がるものたちがいた。

戦士の大國アルザルドの王子クオン、聖者の大國ラマーナの聖姫レナス。

そしてその仲間たち。

3年に及ぶ戦いの果て、終に彼らは闇を討ち果たした。

その戦いの果て、思いを通わせあつたクオン王子とレナス姫は結ばれた。

世界の民がその結婚を祝福し、それぞれの国の王と女王から王位を受けついだ王子と姫は、それをまとめひとつの大好きな国を作り出した。

人類の希望の象徴、光の国アマテリア。

王になつたクオンと王妃になつたレナスは、戦いのときと同じように戦いを支え合いこの国を支えた。

その周りにはかつての仲間たちも集まつてきた。

民たちはそれを見て、この国の永遠の繁栄を予感した。

だがしかし、2年後アマテリアに一筋の暗雲が漂いはじめていた。クオンとレナスの仲睦まじさは、国民の誰もが知っていた。

だがそれに反して、二人の間に子供は出来ていなかつた。そんな折、公妻を迎えるという噂がたつたのだ。

国民たちはその噂を否定した。

クオンとレナス、長い戦いを乗り越え、互いを愛し合い、この国の平和の象徴とも言える二人の仲を引き裂くものが現れるとは思えなかつた。

だが一ヶ月後、アマテリアは激震する。

クオンとレナスが寵姫を迎えると正式なお触れがあつたのだ。

寵姫の名はマリアベル。

国民たちは混乱し、多くの女性はレナスの立場を思いやり涙をし、男たちは一人の仲に入り込むのはどんな悪女かとうわさしあつた。そしてこの国の未来と国王夫妻の平穏を祈つた。

マリアベルは紅茶を一口啜つた。

口の中にほのかな苦味と共に、上品な甘い香りが広がっていく。  
「美味しい…。」

マリアベルは純粹に感心した。これほど美味しい紅茶は飲んだことがなかつた。

「そうだらうそつだらう。マリアのためにわざわざクルーシュから取り寄せたんだ。」

笑顔で言つのはこの国の王クオンだ。むらむらの紫銀の髪に野生的に光る赤い瞳、容貌はこの世のものとは思えないほど整つていて、背の高さと長く戦いの中におかれ引き締まつた肉体、世のすべての女性が魅了されるほど美男子だ。

「わざわざそんな遠くから…。」

マリアベルは半分呆れながら言つてしまつ。

クルーシュはここから海一つほど離れてた大陸にある小国だ。輸送費だけでどれだけの金貨が費やされたことだらう。

「マリアのためになら、俺は天空城にある竜玉すら手に入れて見せるよ。」

「いえ、いりません。」

この人が言うと洒落にならないので、マリアベルは即効で断る。

「ふふ、マリアは無欲だね。」

何が楽しいのかわからないが、陛下はいちいち満面の笑みだ。テーブルに置いてあるマリアベルの手に、手を重ねてきてウインクをしてくる。

後宮の庭でのお茶会といつてはやかな、陛下と一人つきりの時間。後宮の庭は一流の庭師により整えられていて、色々とりどりの花々や桃や桜の木々が咲き誇つてゐる。

陛下の奇妙な行動を無視して、マリアベルは空を見上げて思った。

(「ひ、穏やかな日々なら悪くない。）

そしてクオンの手の感触が無くなつたことに気づいて視線を元に戻すと、彼の姿はなかつた。ついでに言つと、白いテーブルは綺麗な断面で切斷され、椅子が碎けたと思われる粉塵が風に巻かれ飛び去つていつた。

右を向くと後宮の壁にぽつかりと穴が開いているのが見えた。マリアベルはテーブルが倒れる前にお茶のポットを確保する（もつたいない。もつたいない。本当に美味しかつたし。）

「マリアー、そろそろ買い物行きましょー。」

声のする方を向くと、美しい少女が聖母のような微笑を讃え手を振りながらこちらへ走つてくる。金色の緩く巻きのかかつた髪に、蒼い瞳、透き通るような白い肌の天使みたいな美少女。

「レナスさま…。」

その少女はこの国の王妃レナスだつた。

「今日はお忍びで買い物行くつて約束だつたでしょ。私待ちきれなくなつちゃつて。」

駆け寄つてきてこの上ない笑顔で話す美少女に、マリアベルは失礼にならない程度ににらみつけて言つ。

「さつき何をされたんですか？」

さつきとはテーブルが半分に切斷され吹っ飛んで、椅子が粉々になり、後宮の壁に修繕の必要性が生じ、ついでに陛下が行方不明になつたことだ。

「えへへ、ばれちゃつた？ちよつと破壊系の魔法の演習をちよびつと」

頭に手を置き、下をぺろりと出して悪びれなくいつ王妃殿下。

マリアベルは何かをあきらめるようにため息をつき。

「今度はテーブル巻き込まないよつとしてくださいね。」

そう言つた。

「もづ、マリア怒っちゃやー。でも怒つたマリアもかわいいー！」

ぐりぐりぐり、抱きついてじゅれついてくるレナスに、マリアベ

ルはなんとか両腕に持つたお茶をこぼさないようにがんばる。

「お、怒ってませんから、どいてください。お茶かかりますよ。」

しばらく擦り付いて満足したのか、レナスは笑顔を増してマリアベルから離れる。

「それじゃー買い物いこー！マリアの衣装も用意してきたの！」

そう言つてレナスはどこからか、服を取り出す。

それは黒い上等の生地で作られたドレスだったが…。

「なんか尻尾がついてるんですけど…。」

マリアベルは遠慮がちに突っ込んだ。

「ふふ、大丈夫。ちゃんと猫耳カチューシャとぐび…チョーカーも用意したから。」

「ぜんぜん大丈夫じゃないです！しかも首輪つて言いかけたし！」

次は即効で突っ込む。

久しぶりに外出できるのはうれしいが、そんな格好だつたら「めんこ」うむる。

「大丈夫絶対似合つわ！」

満面の笑顔で猫耳衣装一式を押し付けてくる聖姫に、屈辱死させられることを予感したとき。

シユツ

突如、レナスの手にあつた衣装がばらばらになつて飛び散る。  
「やれやれ、マリアが嫌がつてるだろ？ おまえつてやつはおしつけがましい。」

後宮の瓦礫を蹴飛ばしながら、優雅に登場したのは結構前にレナスの魔法で吹き飛ばされたクオンだつた。あくまで優雅に髪を搔き分けながら、左手に持つのは数多の悪魔を葬りし聖剣レガードだ。

「マリアにもつとも似合つ衣装を着せるのは、神に仕える聖女として受けた天命よ。野蛮な蛮国出身のあなたにはわからないでしょうけど。」

レナスの右手に生じた限りなく白い光の球は、爆熱系高位魔法メガトン。一撃でちょっとした砦なら消し飛ばせる。

そのまま一人はじりじりたち位置を替えながら互いの間合いを計り始める。

「ふん、天啓とは笑わせてくれる。大体、そんな衣装でマリアの魅力が引き出せるものか。マリアに似合つのは、そう…例えばバーニガールだ！黒いタイツから覗く引きこもり気味で焼けてない彼女の白い肌。かわいいウサミミがチャームポイント！これなら彼女もきっと喜ぶ！」

いや、絶対着ないし喜ばない。

「やだやだやだ、これだから男つてのは欲望丸出しで反吐が出るわ！マリアのやわらかい肌が晒されるのは、私のベッドの上だけでいいのよ！」

いえ、よくありません。

心の中で突っ込みをしてる間に、聖剣レガードの封印が解かれその存在を神剣へと昇華する。赤い神氣のオーラをまとい強大な力に大気が震えだす。レナスの光の球はさらに輝きを増しメガトンから一段階高位のアルトランへと変貌する。どちらも最終決戦において悪魔の軍勢数百を一撃で葬つたとされる伝説の攻撃だ。

たぶん二つがぶつかり合つたら、王都ぐらい軽く消滅するだろう。ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

まるで嵐のような風が美しい後宮の木々を波立てる。

ふと、マリアベルは背後に気配を感じて振り向いた。

誰だかは分かつていたが、振り向くとやつぱり思つたとおりの人だった。

銀色の髪に、身長2メートルはあるつかという美丈夫。ただその目はいつも寝てるのか起きているのかわからないほど弧を描いたまま細められている。狂王との戦いにおいて、クオンとレナスを支えた最大の腹心にして、現在はアマテリアの宰相を務める切れ者の男カルーア。

カルーアはマリアベルを見ると、やれやれといった感じで両手を上げると、口元をいやらしくねじ曲げた。いつ見てもいやな表情だ

とマリアベルはげんなりする。

「さすが傾国の美女といったところですね、マリアベルさま。お忍びで買い物に行くだけで王都壊滅の危機とはすばらしい。王都に勤めるものの苦労も、その広い心で考えていただけたありがたく存じますよー。」

本当の危機なのだが、この男に言わるとむしろ滅びると思つてしまつのは罪ではないと思いたい。あと傾国の美女つていうのは厭味か。そういうのはレナスやその側近の美女を指し表すものだ。「今回についても、私の責任はいつぺんたりともないとおもうんですけど…。ふたりが買ってにやつてることだし…。」

マリアベルはさすがに憮然として言い返す。

ガシツ

しかしそんな生半可な反論が通じる相手ではないのはわかっています。肩をつかまれ、無表情な笑顔を間近で見せられながら言われる。

「もはや責任とか言うレベルの話ではないんですよ。世界最大の大団。」「人類そのものが滅びる危機なんですよ? わかつてますー? ならないいちいち嫌味言つな。と突っ込みたかったが、怖いので突つ込めない。

「でも、どう止めればいいんですか…。どちらかの味方したら、もつと事態が悪化しそうだし。」

正直先に手を出したレナスが今回は悪いと思うが、それでレナスが納得するとは思えない。ついでに一人の意見にはどちらも賛成できない。

「私に名案があります。」

そう言つて、カルーアはぱっと後ろから何かを取り出した。

「それって…。」

宰相が取り出したものを見たマリアベルノ顔が歪む。

「これを…『じょじょじょじょ…』『じょじょじょじょ…』『じょ…』。」

耳打ちされた言葉に。

「いやです。」

即効断る。

「あーあー。いいんですよ。いいんですよ。かまいませんよー。あー、今日この日をもつて輝かしいアマテリアの輝かしい歴史は終焉を迎えます。悲しいことだけど仕方ありませんよねー。」

わざとらしい演技で頭を抱え、ぜんぜん悲しくなさそうにのた打ち回るカルーア。マリアベルは頭痛を感じた。

「わかりました！やればいいんでしょうやれば！」

「おねがいします。」

ぱつと立ち上がり衣装を渡してくるカルーアに絶望的な気持ちになる。

ぱちり、と指をならすと侍女軍団がやってきて布で私を覆つてくれる。

「早く着替えてくださいよー。そんなに時間ありませんから。」「わかつてます！」

やけくそ氣味に今まで来ていたドレスを脱ぎ捨て、渡された衣装をまとう。

着替え終わるとさすと服を回収して侍女軍団が立ち去つていく。その無常なプロフィッシュナルさが少し恨めしい。

「さあ、まもなく激突ですよ。龍姫さまお願いします。」

なぜかマイク片手に盛り上げる感じで言うカルーアをひと睨みて、王と王妃のほうをむく。二人の距離は既に1メートル、なにやら覚醒を遂げたらしく、剣のオーラが金色に、レナスのほうは光輪を纏っている。たぶんあれがぶつかり合つたらこの大陸ぐらい軽く吹つ飛ぶかもしれない。超迷惑だ。

「クオンさま！レナスさま！」

マリアベルの声に一人が振り向く。一人の目は見開かれ、こちらを凝視する、その視線に顔が熱くなるのを感じる。だがここで止まるわけにはいかない。世界のためとかそんなもののために。

「け、喧嘩しちゃいやにやん。仲良しが一番だにやん？三人で買い

物いくにゃん！悪い子は置いていつちやうだにゃん！

死にたい。この世界から消えうてしまいたい。マリアベルは限りなくそう思った。

今のマリアベルは、レナスが用意したのと同じ猫耳衣装を着ていた。何故かカルーアが持っていたのだ。しかもどこかどことないマイナーチェンジされ、スカートが短く、臍が出ていて、肩まで露出されている。これを身に着けているところを見られているマリアはひたすら精神ダメージを受けていた。

「……。」

一人はこちらをじっと見て固まっている。

もう家に帰つていいいですかと宰相に送つた視線に返されたのは、ダメ押ししろのサイン。

これ以上何をしろと。つと返すと、宰相が世にも奇妙なポーズを取り。

それをやれと……。

「一人が喧嘩すると私泣いちゃうニヤン。」

首を少し横に傾け、俯き気味の上田遣いになり、目に涙を溜め（嘘泣き）、手を曲げながら頭の上にやり、黒い柔らかいグローブに包まれた握りこぶしを前に曲げる。

私はいつたい何をやつてるんだろ？。遠く離れた故郷に住む弟を思い浮かべる。伯爵家の婿養子になつた弟。元氣でやつているか弟。「さすがマリアベルさま、ばついたでそこまで出来る人はいません。

「田頭を押さえ天を仰ぎながら言つ宰相。空虚な拍手がやたらひびく。

「ひみせいーばついたちは関係ないだろ？！

「わ……私は悪くないわよ……。」

「くつ……泣き顔も魅力的だが……泣かれでは……。」

二人は魔法と剣はおさめてくれたが、どちらも憮然として視線を合わせようとはしない。

マリアベルは仕方ないなあとため息をひとつつぶし、一人に歩み寄り手をその手を取つた。

「二人とも買い物行きましょう。」

「「マリア…」」

二人の声が重なる。妙なところで氣の合ひ「一人に、マリアは少し隠れて笑つてしまふ。

「マリア… その格好恥ずかしくないの?」

言い方にピキッとするが、嫌じやないの?といい間違えたのだと思つて気持ちを収める。

「マリア…パンツも黒なのか?」

蹴りを入れたくなつたが、こいつは国王だと思つて我慢する。

「マリア! ちょっと待つて! あの…」

レナスが一際大きな声で言つ。

「なんですか? レナスさま。」

私はきょとんとして振り返る。

「あの、これ私がマリアのために用意したチョーカーなんだけど…。 そうだ! クオンが付けて上げて!」

そう言つてこそとレナスはクオンにチョーカーを手渡す。それを見てクオンは少し畳然とする。

「いいのか、レナス…。」

レナスはこくりとうなずく。

「その方が、マリアも喜んでくれると思つから。」

どうやらそれで仲直りの印にするらしい。

はにかみあう二人。その様子にマリアは笑顔になる。一人が仲良くしてくれるなら、こんな変な格好もたまにはいいかなと思つてしまふ。レナスがクオンに手渡したもののが何かを認識するまでは。

「じゃあ、付けるぞ。マリア。」

そう言つてクオンが掲げ上げたのは、首輪だった。艶やかな皮のベルトに渋いシルバーの金具が光る。金製のプレートにはマリアの名前。そこから伸びるのは鉄の鎖。どうみても首輪だ。チョーカー

ではない。

「ふん！」

私は思いつきり陛下の手をたたき、首輪を地面に叩きつける。

誰が付けるかこんなもの！

「ああ！！嫌がられ切ったじゃない！やつぱりクオンになんか任せ  
るんじゃなかつた！ばかー！」

誰に任せるとかいう問題ではない。

「なんだと！お前が用意したものが悪いんだろうが！」

その通りだが、普通に付けようとした奴に言われたくない。

「野蛮なあなたじや、マリアを着飾らせるなんて無理な話だつたわ  
ね！」

「貴様の選んだ衣装では、マリアを満足させられんといつ話だ！エ  
セ聖女が！」

そしてまた始まる喧嘩という枠を超えた世界的危機をはらむ睨み  
あい。

やつと落ち着いたと思ったのに前に、世界最強の王と王妃が、  
謎の闘氣を発して対峙している。

「いやー、驚きましたー。一度収めるふりをして、また争いを起さ  
せる。安心させてから絶望に叩き落す。悪魔の所業。これで周り  
の絶望感は軽く一倍を越しましたねーー。によ、この悪女ー！どうです、  
王宮に勤めるものの悲鳴の味は？甘美ですかー？」

後ろにはマリアベルの肩を掴んで黒いオーラを放ちながら囁つ率  
相がいる。

状況は数分前に戻つていた…。

マリアベルは頭を抱えて座り込みとなる。

もつ、お分かりだろう。クオンとレナスが仲が良いのなんて嘘つ  
ぱちだつた。

外面がよく利害関係から結婚をした一人だが、その結婚生活は2  
年で破綻を迎えたとしていた。

困った側近たちは、ガス抜きとして公爵を王に娶らせるひとを考

えた。

そこで信じられないことが起る。

公妾にと応募して来た数多の女性の一人に、王と「王妃」が同時に一目ぼれしたのだ。

二人は公妾としてこの子が来てくれるなら、結婚生活続けてやるとのたまつた。

かくして王と王妃の寵姫いけにえが誕生する。

その女性の名はマリアベル。

彼女の仕事はみつつ！

ひとつ、王と王妃の仲を取り持つこと。

ふたつ、王と王妃の喧嘩を止めること。

みつつ、王の子供を産むこと。（王妃は絶対に生みたくないと言つてるから…。）

かくして一人の女性を間に置いての、人類の英雄たる王と王妃の危うい夫婦生活が始まる。

ことのはじまりはなんだつたろう。

そう、遡ればあの結婚式だ。あそこから私の運命はあさつての方に向にねじまがりはじめた気がする。

私には婚約者がいた。5歳年上の許婚ルパート。侯爵家の嫡男である彼は、子爵家の娘にすぎない自分にはもつたいない相手だつたが、彼の家であるギルバード侯爵家は商才に溢れる貴族として有名であり、財力、権力は公爵家に匹敵するとも言われている家だつた。そんな一流貴族の嫡男とみそつかすの子爵家の娘である私が婚約などできたのは、ギルバード家の当主が子爵家の所領を静養地として大層気に入つてくれていたからだつた。

個人的には山と畠しかない素朴というより不便な我が故郷だつたが、侯爵家当主レオナルドさまはその景色をみて「素晴らしい…。」と熱い涙を流させていた。正直、田舎モノの感覚としては理解しがたい。

そんな幸運な縁あつて私はルパートの婚約者になることができたのだ。

ルパートは子供のころからかなりの美形で、幼い時から社交界にデビューする日を貴婦人たちから心待ちにされていた。武芸にも優れ、なんとローレリアン討伐軍の小隊長を務めあげ勳章を授与された。読書ぐらいしか趣味のない、そして美人でもない（宰相が言う傾国の美女はただの嫌味である。）地味な私には重ね重ね不釣合いな人だつたが、それなりに時間を重ね親しくなつていったつもりだつた。

挙式するとなつたのは、私が19歳のとき。本来なら15歳になつたときに結婚するはずだつたのだが、ローレリアンとの戦いに参加した彼は3年間帰つてこなかつた。

戦いが終わり帰つてくると、今度は溜まりに溜まつた嫡子として

の仕事に追われそれが1年、計4年を経てやっと結婚することになったのだ。

### バタンツ

私とルパートの結婚式会場となつた教会、入り口の木製の扉が突然大きな音をたてて開かれた。

「その結婚まつてください！」

姿を表したのは、ピンク色の髪をツインテールにした小柄で可愛らしい美少女だった。

私はその名を知っていた。

「リリーナ！なぜここに！」

タキシード姿を着て隣にいたルパートは、驚いた声で彼女の名を呼ぶ。

彼女の名前はリリーナ。ローレシアントの戦いで、ルパートの部隊を援護し、傷ついた兵士たちを癒し支えたラマーナの聖女の一人だ。

彼女はその瞳に何かやたら熱いものを灯しながら、その目に涙を浮かべていた。

「ごめん、ルパート。あなたのことを諦めようとおもったけど。けど、そんなこと無理だった！私、やっぱりあなたのが好き！」

「リリーナ！」

彼女の熱がルパートのほうに伝わり、ルパートの中で何かが燃え上がる。

二人の瞳が合わさり、その何かを伝え合うのが私にも見えた。

「ごめんなさい、マリアさん！でも私にとつてルパートはとっても大切な人なの！」

そして今度はその熱い瞳が私をサーチして捉える。

「いや……あの……まあ……それは仕方ないっちゃ仕方ないんですけど……」

「そのやたら強いめぢからに私はたじろぐ。

実はなんとなく知つてた。ルパートの友人として彼女を紹介され

たことあるし、一人が付き合つてゐるかもしれないといふのも噂でなんとなく耳に入つてきてたのだ。

結婚式前に友人と話して、「駆け落ちしちやつたりしてねー。」

「あははははー。」とか冗談で言い合つたりもした。まあそれでも結婚すれば落ち着くだらうと思つていたのだ。

まさか本当に駆け落ちなどあるとは思つてなかつたが。

だが、それよりも。

「あの…もう結婚式終わっちゃつたんですけど…。」

誓いの言葉も、指輪の交換も口付けも…。司祭からの祝福も賜つていた。結婚に必要なことはすべてやつてしまつた。ブーケは前に取り合つて事故があつたらしく、ぐじびきにしてくださいという要請だつた。本日の日程はつつがなく終了しました。

普通こういふのは、誓いの言葉の前に颶爽と現れるものではないだろうか…。

だが、私の小さな違和感など、熱く恋の炎を燃やす一人には特に気にならないことだつたらしい。

ガシッと熱く手を握られたので振り向いてみれば、やたら間近に炎を灯した瞳のまま器用に涙を流すルパートの顔があつた。ちょっと暑苦しくて引く。

「すまない、マリア！俺は…おれはリリーナの事が…」「

感極まつて言葉が続かないみたいだ。

「いや…うん…わかつたけど。できれば誓いの言葉が終わる前に来てくればよかつたなあと…そもそも結婚式前に言えれば良かつたんじやないかなとか…ダメですかね…あはは…。」

私の細やかな抗議など、豪快に恋の道をひた走る彼らの耳には届かないらしい。

「俺は、俺はリリーナと共に行く…リリーナ…着いてきてくれるか！？」

「ルパートとならどこへだつていけるよ…！」

燃え上がつた身麗しいカップルは互いを見つめあいながら、教会

の外へ飛び出そうと走つていぐ。もうみんな見守るしかできない。  
だつて別世界だもん。

「待て！ルパート！そんなことは私が許さんぞ！」

だが、一人その行く手を阻むものがいた。ギルバード家当主レオナルドさまだ。いつの間に用意したのか片手には鋭く光を放つ剣を持ち構えている。

「父さん！」

ルパートもいつのま用意したのか腰の剣を引き抜く。少なくとも結婚式中はそんなもの持つてなかつた。

「父さんどいてくれ！いくら父さんといえども、邪魔するなら容赦できない！」

悲壮な顔で剣を父に向けるルパート。リリーナはそれを祈るよう見守る。

「笑わせてくれるわ若造が！貴様に剣を教えたのは誰だと思つ！」

「確かに剣は父さんに習つた。だが俺は今日こそ父さんを越えてみせる！」

なんでこの人たちはこんなに燃えてるのだろう。

「老骨とは言えまだまだお前などに負けはせん！いくぞ！」

そう言つて侯爵さまは剣を振りかぶつて飛び掛り。

「ぐはっ」

途中で倒れた。

「すまない父さん！こんなこともあるつかと痺れ薬を朝食に仕込んでおいたんだ！」

「恋の道は肉親にも非情なのね……。」

戦いの無情さに涙を流すリリー。

「いや！そんな準備する時間あるなら普通に婚約解消しようよ！なんでそこだけ用意周到なのかな！？私まちがつてるかな！」  
さすがに私は切れる。

「マリア……。」

あ、やつと反応してくれた。

「すまない、君のことを愛してなかつたわけじゃない。ただ俺の中でリリーナが一番大切な人だつただけなんだ。」  
「だめだ、こいつ話が通じなねえ…。」

「行きましょうルパート！」

「そうだね！二人だけの新たなる道へ！」

脱力感に襲われた私は、手を繋いできらきら光を発しながら去つていく花婿とその恋人をただただ見送つた。

後に残されたのは花嫁姿の私と、ぴくぴくと痙攣するレオナルドさま、茫然とする参列者たち。そして脂汗を流しながら成り行きを見守つていた父さまが司祭に問いかける。

「あのお…こいつた場合、離婚することになるんじょうつか…。結婚成立してなかつたことに出来ませんかねえ…。」

離婚暦が付くと貴族社会では、嫁ぐときの条件がさらに厳しくなる。

私も不安になつて司祭を見る。

司祭はぽかんとしていた表情を一変させ、莊厳な顔つきになると静かに両手を上空に掲げた。

ごくりつ

教会に集まつたみんなが息を呑む。  
ばつてん

「アウトー！」

手を頭上で交差させた司祭の声が高々と教会に響き渡り、私の家族たちが失意の体勢で床に膝をつく。

なんかもうどうでも良くなつてきた。

そんな訳で私は、結婚して10分ぐらいでばついちになつた。いろいろ終わつたあとで友人がぽんつと肩を叩いてなぐさめるようになつてくれた。

「まあ、処女捧げなかつただけ良かつたじゃん。」  
それはフォローになつていない。

\* \* \*

それから一年ぐらいたつた頃。

こんこんこんと白室のドアがノックされ、返事をするまもなく母さまが入ってきた。

「もう、マリア。たまには外に出ないと、体悪くするわよ。」

「うちは大した家系じゃないので母さまはちょっと裕福な庶民の出だ。着てるものはそれなりのものだが、行動は貴族らしいところがなくおばさんじみている。」

今も侍女に任せることなく、私の部屋のカーテンを自分でぱっぱとあけていく。

正午の太陽の光が差し込んできた。

「まぶしい…。」

私が文句を呟くと、眉をひそめて小言を囁つてきた。  
「引きこもつてゐからそんな風に感じるのよ。ちょっと散歩でもしてきなさい。」

あれから私は引きこもりになつていた。別にルパートが駆け落ちしたことはそれほどショックではなかつた。彼らの行動があまりにもぶつとびすぎていたから。ただ趣味の読書以外は花嫁修業に費やしてきた自分の人生やら、結婚式で許婚に逃げられた外聞の悪さやらいろいろなことがあって、ここ一年はほとんど外出もせず怠惰に過ごしていた。

手に入れた書庫から持つてきた本を開いてベッドに座つてる私をみて、母さまはため息を吐くとほんつと右手に持つていたアルバムの束を私のベッドの上に置いた。

「侯爵さまがお見合い相手を探してくれたから良さそうな人見繕つておきなさい。もつすぐ20歳でしょ。本当に貴い手がなくなっちやうわよ。」

私はそれを見ていやそつに眉をしかめる。

「もう結婚はいいでしょ。侯爵家にぶつといパイプ作つてあげたん

だから。」

ルパートの駆け落ち事件から一週間後、呆然と故郷に戻った私たち家族に侯爵家から招待状が送られてきた。内容は私の婚姻の件でお詫びをしたいということだった。

みそつかす子爵家の私たちにとって、侯爵家嫡子との婚約というのは千載一遇のチャンスだった。その話が破談になつたからには、何らかの補填がほしいのは確かだつた。だが同時に相手は侯爵家、馬鹿な要求などをして機嫌を損ねると我が家なんてあつという間に没落してしまう。

結局相手の出方に添い、手に入れられるものだけでも確保しようというのが我が家全員一致の意見だつた。

そして家族とともにたどり着いた侯爵家の門、何度か訪れたことがあるが私たちの家とはまるで違つ。まわりに広大な庭が広がり、その中にまるでお城みたいな大きさの綺麗な家が建つている。

案内役の老齢の執事に連れられ、石畳の道を歩く。だんだんと緊張してきた。

そして家の前まで来ると、執事についてきていた侍女が豪勢な装飾がされた扉を両側から開ける。

扉の向こうの光景を見た瞬間、私たち家族は固まつた。

「…………マリアベルさま、この度は本当に申し訳ありませんでした」

そこには侍女や使用人、侯爵家にいる人間の全員が集まって一斉に土下座していた。

一番前にいるのは当主のレオナルドさまとその妻エレナさまだ。周りには侯爵家の家族や親類が。もちろんみんな土下座している。

「…………」

私たち家族は絶句するしかなかつた。侯爵という身分の人に土下座され気の弱い父さまが青い顔をして倒れそくなつてゐるのを、母さまが支えている。

そのまま30秒ほど頭を床につけていた侯爵は、立ち上がると熱

い涙をながら私の手を握り締めてきた。

「マリアくん、本当にすまない。不肖の息子がかけた迷惑を、いつたいどう君にお詫びしたらいいのか。謝つても謝りきれない。」

「い…いえ…。」

やりすぎです。なんてとてもじやないが言えない。

「あなた、気持ちはわかるけど、こんな場所で話すなんて失礼ですわよ。ちゃんと客間に案内しなければ。」

「ああ、そうだな。君たち来てくれたまえ。客間にじつくつ話そう。」

レオナルドさまは流した熱い涙をぬぐいながら、使用人に檄を飛ばす。

「最高級のお茶と菓子を準備せよ！我が侯爵家総力をもつてもてなせ！手を抜いたものは明日の朝日を見れぬと知れ！」

「いえ…そんな風に歓待されましても…。」

とびだしてきた物騒な言葉に青くなつて小声で言つ父。だがレオナルド様の耳に入った様子はない。

そのまま大量の執事と侍女にぞろぞろ連れられて客間へと通された。

侯爵家夫妻と、私たち家族は向かい合つよつに座つた。

「さて、今回の息子の蛮行を止めきれず、マリアくんには非常に申し訳ないことをした。改めて謝罪をさせてくれ。」

「いいえ。あまりお気になさらないでください。侯爵さまのせいではないですし、ルパートにも事情があつたのだと思います。」

ルパートに共感するところなどまつたくないが、侯爵さまにここまでされてこれ以上文句を言えるはずもない。

レオナルドさまは私の言葉を聞くと、目頭を押さえ呻く。

「くう、なんといふい子なんだ。それをおいは…。」「あなた…ちょっと…。」

侯爵夫人にたしなめられ、レオナルドさまはハンカチで涙をぬぐい視線を戻した。

「ああ…、すまない。今回の件で、マリアくんや子爵家に多大な迷惑をかけてしまった。それについて我が家からできるだけの補償をしたいと思う。」

それを聞いてほっとする。あれだけ壮大な謝罪をされたのだ。こちらからは何も言えない状態だった。もともと幸運で転がり込んだ結婚話とはいえ、うちとしてはちょっとぐらい得しどきたいといつのがみみつちい本音だつた。

「まず我が家が所有するクルーデ金鉱を譲渡しようと思つ。」「ふほつ」「ふほつ」

紅茶を含んでいた父さまが、あわてて右を向いてそれを噴き出す。クルーデ金鉱は世界第3位の産出量を誇る金鉱だ。その価値たるや、何千億は軽く越す。補償とかとは異次元の話である。

「」ほつごほつごほつ

咳き込んで何も言えない父さまにかわり私があわてて断りを入れる。

「い、いえ、そんなものとてもじゃないですが」「受け取れません」と言おうとすると。

「わかつてているとも！こんなもののじや君の受けた痛みをぬぐい去ることはできなってことは。もちろん、これだけで済ますつもりなど毛頭ない！これは、君たち家族に迷惑をかけたお詫びだと思ってくれ。」

熱くごぶしを握りしめた侯爵の叫びに書き消される。

「え…もう離婚の補償とかいうレベルじゃないので受け取れないという話なんですけど…。」

「今回君は息子のせいで、未来の侯爵夫人という立場を失つてしまつた。」

「そいいえばそうだつたと思いながら、私は落ち着こうと紅茶を一口含み。」

「だから君が良ければ、私の妻として迎え侯爵夫人になつてもらおうと思う…。」

「ふほつ」

噴き出した。

「いほつ いほつ いほつ」「

「確かに年の差はある。だが私なりに精一杯、君に満足して貰える夫となるよう勤めるつもりだ！」

立ち上がり握りこぶしを作りながら、大きな声で宣言する

「ちょ… ちょっと待ってください。奥様はどうなるんですか。」

私は青くなりながら侯爵夫人のほうを見る。おしどり夫婦として有名な侯爵夫妻の絆に私のせいひびがはいつたら、一生罪悪感に襲われ、周りから後ろ指を差されかねない。

すると侯爵夫人は、侯爵とまったく同じ格好ですくつと立ち上がる。

「大丈夫よ！ 私もあなたの侍女になつて精一杯サポートするわ！ あなたを立派な侯爵夫人にしてみせる！」

「絶対にやめてください！」

使命感に燃え上がる侯爵夫婦に、身分の差も忘れて私は叫んだ。  
ばたんっ

私の叫びとほぼ同時に、客間の扉が開いた。

「そうです！ さすがにマリアさまとレオナルドさまではお年が離れすぎです。」

「やつぱり夫婦は年が近いほうがいいに決まっている！」

現れたのは私たちより一年前に結婚した、侯爵家次男ジュラートさまとその妻エリーさまだ。

「ルパートさまが失踪された以上、侯爵家を継ぐのはこのジュラート！」

「ジュラートならルパートさまよりマリアベルさまにお年が近い！」

「ここは私たちが離婚を！」

「それも絶対に絶対にやめてくださいー」  
「… ゼエ… ゼエ… 」

息の会つた会話で離婚を申し出でくるジュラート夫妻にまたも叫

ばさせられた。遠慮していると侯爵家ゆかりの夫婦が離婚しかねない。心労と叫びすぎで息が切れた。

「くう、確かに誰かと代わりに結婚してすむ問題ではなかつた。」

「私たちが浅はかだつたわね。」

「おいたわしいわ、マリアベルさま。机に臥せてしまわれて、やはり心の傷が…。」

「突つ込みつかれただけです…。」

「父上、マリアさまへのお詫びは、心の傷が回復なさつた後にすべきかと。」

「うむ、確かに急ぎすぎたかもしれん…。」

状況認識は食い違つてるが、どうにか思いどどまつてくれて、私もほつとひと息をついた。

「マリアくんへのお詫びは後日たくさんさせて頂こう。」

どつちかつていうと何もして欲しく無くなつてきてるんですが…。「今回の件で、我が侯爵家とあなたがた子爵家の間にできるはずだつた繋がりがなくなつてしまつた。」

そう、実際ルパートとの事件での被害はそれくらいだった。下級貴族としては自分たちの地位を守る上でも、さらに栄えていく上でも上級貴族との繋がりは重要なことだった。

「そこでだ。」

レオナルドさまは視線を次男のジュラートに向ける。ジュラートはそれを受け取りこくりと頷く。

「このジュラート。侯爵家当主の継承権を放棄します。」

「なつ…。」

高らかな宣言に、再び私と父母の顔が青くなる。まだ何かやるつもりですか。

「そこでだ。リングくん。」

次に丞先が向いたのは、巻き込まれたくないソファーの端で小さくなり気配を消そとがんばついていた弟だった。

「は…はい…。」

自分に話題が向けられ青くなりながら返事を返す弟に。レオナルドはさすまはにこにこと爆弾発言をぶちかます。

「どうだね。うちに婿養子に来て侯爵の地位を継がないかね。」

「ふほつ」

お茶など口に含んでないはずだが、口から水分を噴き出し器用に咳き込む弟。

「「ほつ」」

だが侯爵はまったく気にしてない。

「残念だがうちにはもう息子がいなくてね。私とジュラートがマリアくんに断わられた以上、血縁をつなぐ事ができない。君が良ければ長女のフィーナと結婚して侯爵の地位を継いでほしい。」

「い…いえ、僕は…。」

子爵家なら留学中の兄が継ぐから問題ないが、小心者のうちの家系がそんな話を受け入れられるはずがなかつた、はずだつたのだが。

「どれ、フィーナ！」

ぽんぽんっとレオナルドさまが手を打ち鳴らすと、「はーい」と可愛らしい声が聞こえドアが開かれた。

現れたのはふわふわした感じの可愛らしい美少女。亞麻色の髪は緩やかなウェーブを描き背に広がり、大きなつぶらな瞳は夢を見るようぼやつとしている。

「ギルバード・家長家のフィーナと言いますはじめまして。」

その可憐な笑顔を見て弟の頬が赤みを帯びる。弟は家族以外の女に免疫がなかつた。おまけにフィーナは弟の理想を体現したような女の子だった。

「フィーナ、こちらがマリアベルくんの弟のリングくんだ。近い将来お前と結婚しこの伯爵家を継ぐのだ。ご挨拶しなさい。」

「え、僕にはちょっと荷が重いので辞退させてい」

あわてて断わろうとする弟だったが。

「まあ！不束者ですがよろしくお願ひします！一緒にがんばりましょウリングさま！」

最後まで言う前に手を握られ、フィーナの笑顔を間近で見せられ。

「が…がんばります！」

真っ赤な顔で叫んだ。

「はつはつは、良かつた良かつた。」

ぱちぱちぱち

侯爵家のみんながほつとしたような笑顔で拍手する。私も他人事なのでとりあえず拍手しといた。父さまと母さまも侯爵家に逆らつ気などないので拍手。

こうしてフィーナの笑顔にノックアウトされ心神喪失状態だった弟を置いて、みんなに祝福されながら我が家から未来の侯爵が誕生した。

その後の話し合いで金鉱の件はなんとか断わったが、世界第四位の銀鉱やらウエルスト地方の香辛料の独占交易権、魔法特許などが（半場無理やり）譲渡され、子爵家は一気にお金持ちになった。

帰り際に「困った事があつたら何でも言つてくれ。我が家が総力をかけて解決しよう。」と言われ、私は今後、絶対侯爵家の人間には何も相談しないようにしなければと心に誓つた。

そして、この親にしてあの子あり、私はルパートは間違いなくこの人たちの家族だと確信した。

こうしてここ一年で侯爵家の後継者を出し、おおきな資産を手に入れた我が子爵家はかつてない隆盛を誇るようになつたが、それに反して父さまはげつそりやせ細つた。侯爵家との間にできた巨大なコネクションから、隙あらば巨額の資産が送られてきて断わるのに心労を強いられているからだ。

ギルバード侯爵領では『マリアベルさまはこんなに健氣で良い子伝説』などというものが伝播され、私がまるで偉人のごとく扱われているという。その中には古代の宗教と結びつき私を崇拜するマリア教なる良く分からぬものまで出来たといつ。

侯爵家によると離婚によって下がつた私の評判を回復する計画の一環らしい。もう絶対侯爵領には行かない！

そんな活動が子爵領にも伝播してきていて、離婚したことの噂も相まつて私は極めて外に出たくない状況になっていた。

私が本好きだと聞いて侯爵家がプレゼントしてくれた最新の本が常に補給される書庫はありがたかったが、私のひきこもりにも拍車をかけた。

部屋の掃除を終えた母さまは、ベッドの上で変わらず本を読む私を一度あきれたように見ると、ため息をつき出て行つた。

ぱつかぱつかぱつか、ひひーん

本に集中していた私の耳に早馬の足跡が聞こえた。なんだろう、と思ったが私への用事ではないだろ?と思つてまた本に集中しようとしたところ。

「マリア!ちょっとマリアー!」

ばたばたと母さまが足跡を響かせながら私の部屋にかけてきた。扉をばたんと開けて入ってきた母は、珍しく満面の笑顔だった。

「あんた、これこれ!」

私宛てつことはまた侯爵家からのお見合いの誘いか。うんざりしながら、差し出してきた封筒を受け取るとそれは侯爵家からではなく、なんと王宮からの書状だった。

「なにこれ…。」

田舎の貴族の娘である私には王家に知り合いなどいなかつた。不安になつて尋ねてみると、母さまはにこにこして知つてゐみたいなのに答えてくれない。

仕方なく便箋を一寧に空けると、中には一枚の書状が入つていた。ながながと続くまどろっこしい文章を読み飛ばしていくと最後にこう書かれていた。

『子爵家令嬢マリアベルさまを我が國の公妾として招致します。』

「はあ?」

意味がわからず、ついに顔を歪ませる私に母さまはほしゃいだよう答える。

「実はね。一ヶ月前に、王宮が公妾を募集してたのよ。それではまず

書類選考するってことだったんだけど。それにあなたの資料を送つてみの。」「それで…。」「受かつちゃつたみたいね。」「アイドルのオーディションかー！」私の突っ込みが子爵家の中に木靈した。

### 3羽（後書き）

何故か3羽にして誰特の過去編突入。

一度書いただけだと会話とかうまくつなげられないでの、後で時間が  
があるとき修正していきます。すいません（ノヽヽ）  
実は2羽も修正しています。

私はその手紙を茫然と見つめる。

『子爵家令嬢マリアベルさまを我が国の公妾として招致します。』  
『なんでこんなことになつたのか。』

「応募するのは美女揃いだろうから、まさかマリアが受かるなんて思つてなかつたけど。だめもとも応募してみるもんね。良かつたわねー。』

「良かない！」

私はのんきに喜ぶ母さまを怒鳴りつける。

「なんでこんなのに応募したのよ！しかも勝手に！」

「だつてあんた引きこもつて本読んでばっかりだつたじやない。侯爵さまがお見合いの話を持つてきてくださつても見向きもしないしこのままじゃずっと独りよ。まだ20歳だからいいけど、これが30越したりしたら。お世話になつてるレオナルド様にも申し訳ないわ。だから妾でも貰つてもらひたいと思つて。」

「だからつて！」

確かに貴族社会で30歳の独り身は肩身が狭い。

「妾つてことはあのクオンさまとレナスさまの間に割つて入る」とになるのよ。そっちのほうがよっぽど肩身狭いじゃない！

アルザルドとラマーナが併合されて作られた世界最大の国家アマテリアの王と王妃、クオンさまとレナスさま。世界を救つた英雄であり、人類の守護者、この国の平和と希望の象徴たる夫婦だ。二人の仲を引き裂いたりすれば、針のむしろじこの話ではない。世界の歴史に名が残る。間違いなく悪人としてだ。

「子供が出来ないんですつて…。公妾を召されるとなるなんてレナスさまお可愛そうに…。」

「あんたがいのうなー！」

「でも王家からの書状だし、今更断るわけにもいかないでしょー。」

「このままじや一生ばつこひ独身のままだ。とつあんてす行つてもなれ

「ぐぐぐう。簡単に言つて。」

「それにそろそろレオナルドさまが迎えに来るはずよ。」

「なにいー！？」

סְלָמָנוּתָה

母さまの言葉に呼応するよつに、大量的蹄の音がする。

がばつと窓にすがりつき外を見ると、そこにはたくさんの騎馬兵を引き連れ自らも甲冑を纏つたレオナルドさまがこちらに走ってき

「我らがギルバード家四銃士」

「老骨ながらもすべての力を出しつくし」

「マリアベルさまをお守りしよ、アーヴィー。」

「ふがふがつふお」

その後ろではまつたく知らないおじいさんたちが、銃を構えてボーズをとっている。

ガラガラガラ

騎馬部隊の後ろから祭りのみこしみたいに豪快に飾り立てられた馬車がやつてくる。

「アコアくんにふさわしい馬車と、腕の良い仕立て屋を用意してき  
たー君がクオンさまの寵愛を受け、立派な妾になれるよ」全力でサ  
ポートしよう。」

いつの間にか所領の人が家の前にあつまって、『祝マリアベルさ

ま』『公妾になつても応援します』などの横断幕を掲げ花吹雪を散らしている。

近くに住む領民の人たちが、こちらに向かって「がんばってー」などと声援を飛ばしている。

出店まで開かれていて、酒やら香草焼きやらを手に持つてどんちやん騒ぎだ。

『マリアさま送別会会場はこちらです。』といつ立て札はなんだろうか…。

中にはハンカチで目元を何度も拭っている人もいて、完全にお別れムードだ。

「ねえ…、私の選択権はどこに…。」

「どこにもないじゃない？がんばってね。マリア。」

いつの間にか家に上がりこんでいた友人が、出店のジュースを飲みながら私の肩をたたいて去つていった。

\* \* \*

それから、私は王都へ連れられていった。

馬車は王都の中央通りを王宮に向かってゆっくり進んでいる。私はそつと窓から外を見よつとして。

「ひつ…」

慌てて隠れた。

「みなさん歓迎のためにこんなに集まつてくださつてるのですね。」

侯爵家から調達された侍女が、にこにこ笑顔でお茶を入れながら言つ。

「絶対ちがう！絶対ちがうしー。」

大通りの端に山のように集まつた人々。若い人から中年、老人、夫婦や恋人、女の子たち子供たち、みんなが凄い顔でこの馬車を睨んでいた。

そこから感じられるのは紛れもない敵意。嫌でも国の英雄たる夫

妻の妾になることが、どんなことかを私に教えてくれる。

「マリアさま。宿でクッキーを焼いてきたんです。どうかご賞味ください。」

能天気な侍女がお茶うけに出したのは小金色に焼けたおいしそうなクッキーだつたが。

ぱりぱりぱり

味がまったく感じられない……。

胃が痛くなつてきた……。

\* \* \*

「…………」

「まあ、マリアさま肌が真っ白ですわ。いつもよりお綺麗です。」

王城についても状況はまつたく変わらなかつた。衛兵から侍女、文官まで凄い勢いで睨んでくる。お蔭で血の気が引いて、侍女に褒められてしまつた。

侯爵家から来た侍女はのん気な笑顔で私に話しかけてくる。なぜ侯爵領の人たちはこんなにも神経が太いのだろう。いや、もしかしたらまつたく気づいてないのかもしれない。でもどうやつたらこの針のむしろのような視線に気づかずにはられるのだろう。

そんな疑問を抱いていると、向こうの方からシンプルなスーツに身を包んだ銀髪の青年が優雅な仕草でこちらに歩いてきた。

私はその姿を見て目を見開く。

「銀の狐…カルーア…。」

最終決戦における英雄の一人であり、勇者クオント聖姫レナスをその知恵と戦略により影から支えた参謀。その表にはあまり出ないがその貢献度は王と王妃二人に匹敵すると言われている。そして現在はアマテリアの宰相をしていて、国政にその辣腕を振るつてている。歴史の教科書にのつてもおかしくない。いや、確實に乗るだろう人物だ。

世情には疎い私でも本に乗っていた写真でその姿は知っていた。

突然の偉人の登場にしばし茫然としたが、はつと我に帰る。カル  
ーアさまと言えばクオンさまとレナスさまの一一番の側近だ。公妾の  
件もきっと快く思つていらないに違いない。

最終決戦でも有数の英雄に睨まれたら、命がいくつあっても足り  
ない。

私は自分の未来が想像以上に危ういことに今更ながら気づき真つ  
青になる。

背の高い銀色の髪を持つ青年が近づいてくるほどに、頬から嫌な  
汗が噴出していく。

「ごめんなさい。申し込んだのは私じゃないんです。許してください。  
成敗するなら母さまとかにしてください。」

と、目の前に立った青年に思わず土下座しそうになつたとき、青  
年はその細い目を優しげに曲げ優雅な一礼をした。

「良くな来てくださいました、龍姫さま。アマテリアの宰相であるカ  
ルーアです。以後お見知りおきください。」

その言葉に自分への悪意らしきものは見えなかつた。むしろ本当に  
に歓迎してくれているようにすら見える。

「そうだよね。」

良く考えたらこの国の中核を担う人間なのだ。公妾の件について  
もちゃんと受け入れているはずだ。歓迎できなくても私情など挟ん  
だりはしないのだろう。

やはり英雄となると一般人とは一味違うのだ。

優しい笑顔と紳士的な態度はこれまでの旅と人々の視線に疲れた  
心を癒してくれる。英雄は伊達ではないと、私はカルーアさまに尊  
敬の念を抱いた。

ほつとすると、ふと先ほどカルーアさまが言つた台詞がひつかか  
つた。

「龍姫さま?」

首をかしげる。龍姫とは妾の中でも王の寵愛を受けた女性に使わ

れる呼称だ。王に気に入られるどころか、会ったことすらない自分に使われるような呼称ではない。そして王と会つたとしても、世界最高の美少女、天使の顯現と呼ばれるレナスさまがいるのに、自分を気に入るはずなどなかつた。

むしろこんな不細工いらんと追い出されたりしないか期待してしまつぐらいだ。

「はい、マリアベルさまのことですよ。王の寵愛を一身に受ける公主が呼ばれる呼称です。」

ざわつ

周りにいた王宮勤めの侍女や文官たちの間に動搖が走る。王妃の名前を呼び涙を流して座り込む侍女まで出てきた。それを慰める侍女の目にも涙が浮かんでいる。

そして私を睨む視線も一層と強さをました。

何これ、どんな罰ゲームですか？

そもそもクオンさまとは初対面どころか会つたことすらないはずだ。愛を一身に受けるどころか、知り合いですらない。

誤解です。これは何かの間違いなんです。

と言い訳したら信じてくれるだらうか。もはやアウヒイビヒの話ではない親の敵を見るようなまわりの視線にそう思つ。

「それではこれからクオン陛下とレナス王妃殿下にお会いしていただきます。どうぞこちらに。」

まわりの騒ぎなどまるでなかつたかのようだ、カルーアさまは笑顔で私をエスコートする。

はやくこの場から逃げ出したかつた私にはありがたかつたので素直についていく。

王城の廊下を歩いていると不意に人通りが少なくなつていくことに気づく。さつきまでは常に侍女や文官、貴族らしき人たちが通りかかってカルーアさまに挨拶（と私をひと睨み）していくのだが、今はもう誰も歩いていない。

思わずキヨロキヨロしてしまつと、カルーアさまが気づいたよう

で答えてくれた。

「王と王妃の居室に近づけるのは、王都でもわずかな人間だけです。侍女にも信用のおける人間を使っています。」

なるほど、警備上の理由でそうなっているのかと私は納得する。

「ふふ、あんなもの国民に見られるわけにはいきませんからね。」

だからこの時カルーアが小声でそう呟いたことにまったく気づかなかつた。

廊下を進んでいくと、やがて大きな扉が見えた。鉄製の頑丈そうな扉だが、美しい装飾が施されていて物々しい雰囲気はない。扉の横には一人の兵士が立っていた。

私はその兵士たちの顔を見て、目を見開く。

「シンシア…、ルシア…。」

「よくご存知で。寵姫さまは博識でいらっしゃいますね。」

知ってるも何もカルーアさまと同じく決戦の英雄たちである。クオンさまたちほどの知名度はないが、知っている人はちゃんと知っている。アマテリアは最高の英雄一人が作った国であり、その国の中枢を担うのも英雄である仲間たちであることは知っていた。

だが、本で見るような有名人が実際に登場することには、いちいち驚きを禁じえない。しかも門番である。職業を見下したりするつもりはないが、英雄の使いどころとしてはやたら豪華すぎるのではないか。

「うつ…。」

一人をそつと窺うと、王都の人たちのように睨んではこないが感情を読めない瞳で見つめられこちらがたじたじになつてしまつ。やっぱり内心では嫌われてたりするのだろうか。

「さて、寵姫さま。これより先は侍女は置いて、寵姫さま一人でついて来ていただけますでしょうか。ここより入れるのは限られた人間だけでございますので。」

え、やだ心細いし。

侯爵家ちよつと脳天氣すぎる侍女でも、この完全アウェイの状

況ではいて欲しかつた。「コネたら一人ぐらいなんとかならないかと思つて横を見ると、侍女たちの姿は影も形もなかつた。

「えつ…？み、みんなどこ…？」

愕然としてきょろきょろとしてしまつと、ドレスの袖口から紙切れが一枚ひらひらと落ちた。

なんだろうと拾い上げてみて見ると、

『武運を！』

という文字が侯爵家の侍女がデフォルメされたキャラがペロリと舌を出したやたら可愛いイラストと共に書かれていた。

絶望と脱力感に紙は再び手のひらからひらひらと地面に落ちていく。

「さて、侍女の方々も立ち去られたことですし、中に入つて頂きましょう。」

味方不在の絶望に崩れ落ちかけた私は、そのままカルーアさまにずるずると引きずられて扉の中に入つていつた。

視界の端にルシアさんが燃える『//』の袋を持つて私が落とした紙切れを拾つてるのが見えた。

案外、良い人なのかもしれない…。そう思った。

\*\*\*

それから、私は待合室らしきところに小一時間ほど待たされてい る。

カルーアさまは何かやらなければならにことがあるらしい部屋には誰もいない。

中に入つたら英雄に囲まれてリンチされたりするのではと、自らの想像に恐怖していた私も用意されたお茶を飲んで少し落ち着いていた。

だいたいクオン陛下とは初対面になるわけだ。母さまがどんな応募の仕方をしたか知らないが、私が選ばれたのには何らかの誤解が

あるはずだ。みそつかすの下級貴族としては、今更こちらから嫌ですとは言えない状況だが、陛下のほうが直接会つて気に入らずに断るという可能性もある。

椅子に座つたまま正面を見ると、クオンさまとレナスさまが仲良く寄り添つて微笑んでいる壁画が飾られている。クオンさまもレナスさまとても美しく、まるで神様と天使みたいな夫婦である。その固く結ばれた手は、二人の強い絆を表している。

そうこんな最高の恋人同士の中に私など入れるわけないのである。王都の人たちの心配は杞憂である。

だが、同時に思う。その愛が奪われることは万に一つも無いとはいえ、こんなにも仲睦まじく愛する夫が形だけでも公妾を迎えるという事実は、レナスさまを深く傷つけるだらうといふことを。

ズキンッ

絵画の中で幸せそうに笑う一人。天使のように優しく愛らしい笑顔を浮かべるレナスさま。今レナスさまはどういう気持ちでいるのだろう。

公妾の謁見には王妃も付き添うことになつてゐる。勝負にならないような相手とはいえ、夫の傍にいることを許されたもう一人の女性を見てどう思つか。

その優しい御心は國中を癒し、誰よりも強い心で英雄たちの軍を支えたと言われる少女。泣き顔は決して見せないかもしない。でもその心は深い悲しみに包まれているだろう。

もしも、クオンさまが拒否された時はこちらから断ろうと思つた。なるべく、出来れば、婉曲に、それとなく、問題が起ころない程度で、さりげなく。

そう私が若干後ろ向きな決心をしたところ、カルーアさまが戻つてきた。

「お待たせして申し訳ありません、寵姫さま。早速陛下の下へご案内致します。」

カルーアさまは優雅な一礼を再び見せ、私を連れて行こうとした。

「あの…、カルーアさま。」

「どうされました？ 龍姫さま。」

私の呼びかけにカルーアさまは首をかしげて返事を返す。

「龍姫と呼ぶのはやめていただけないでしょ？ つか。」

そんな呼称を聞いては王妃さまはさらに傷つかることになるだろ？ そもそも陛下とあつたことすらないので龍姫も糞もないのが。

「ふーむ…。」

カルーアさまは数瞬悩まれたようだが、

「まあ、いいでしょ。これからはマコアをまとおよびしますね。」

と言つてくれた。それから、

「私のことはカルーアとお呼びください。」

と言つた。

小心者の私はそんなの無理なので、なるべく名前はよばないようにしてようと決心した。

そうして私は今、謁見の間の扉の前にいる。

「あまり緊張などされないよう気軽にされてくださいね。」

とカルーアさまは優しい笑顔で言つてくれたが、緊張しまくっている。

この先にいるのは世界の英雄にして、この国の王と王妃であるクオンをまとナスさま。この国を治め、民に称えられる国王夫婦。そして私は仮にとはいへナスさまの恋敵みたいな状況。

心臓がどくどくと嫌な音を経てる。

私は生唾を“ぐり”と飲み込む。

覚悟を決め扉を開けると、そこには血みどろで殴りあうクオンさまとナスさまがいた。

バタン

閉める。

「おや、どうかされましたか？」

カルーアさまが優しい笑顔のまま尋ねてくる。

「いえ、ちょっと医者を紹介していただけませんか。どうも田の調子が悪いよ。」

私は目頭を押さえ呟く。最近の精神的疲労のせいだろうか、幻覚が見え始めたみたいだ。

「それはいけませんね。私が見てみましょう。医師の資格を持つてるのでご安心ください。」

そう言ってカルーアさまは私を上に向かせ、まぶたを指で開き魔法の光を当てチェックする。

「ふむ、本の読みすぎで近視がちですが、それ以外はいたつて健康ですよ。」

「そうですか…。」

そうなると脳の異常だろうか。ストレスが原因なのかもしない。実家に帰れたらゆっくり静養して本でも読もう。そう心に決めた。

ふう、と深呼吸して一息つき、心を落ち着ける。

大丈夫大丈夫、私は正常だ。ちょっと疲れて幻覚が見えただけ。もう落ち着いたしあんなもの見えないはずだ。そうしてもう一度扉を開ける。

そこには殴りあう国王夫妻の姿はなかつた。

良かつた幻覚だった。ほつと一息つく。

「いらっしゃい、マリア！ 私、王妃のレナスよ。ようしくね。」

氣を取り直して中を見ると、そこには天使がいた。

金色のふわふわの髪、柔らかく白い頬、こちらを見る蒼い宝石のような瞳、その姿はまさしく天使。翼が生えてないのが不思議なぐらいだ。

湛える微笑はあるの美しい絵画以上に優しく、思わず見ほれてしまつた。

「あ…、わたしマリアベルと申します。よろしくお願いします。」

なんとか立ち直り挨拶する私に、レナスさまは笑みを一層深めた。

「くすっ、マリアつたらぼけーっとしちゃってどうしたの？」

あまりに屈託のない態度に戸惑う。相手にならないとはい、一

応彼女と王の寵愛を争う役職として来たはずなのだが。

いや、実際相手にならない。とてもじやないが敵うどじるか勝負になるはずもない。とか勝ち負けを言ひ事すらおこがましい。それどころかこんな美少女が隣にいたら、私の存在が認識されるかすら怪しい。

そうだ。確かにそうだ。うん、心配などすることなかつたのかも  
しない。私程度の存在が王妃さまの心を揺さぶることなどありえ  
なかつたのだ。良かつた良かつた。

۶۱

いや、しかしだ。本当は心の底では傷ついているのかもしれない。それを誰にも見せまいと、優しい心で私にも接してくれてのかもしない。そうだとしたら、出来るだけ傷つけないような態度で陛下と王妃殿下に接しなければいけない。

思考の海に陥りかけたとき、はつと気づく。そういえば、陛下に挨拶していない。

これはまずい。陛下に謁見に来たのに、その陛下に挨拶すらして

私は慌ててクオンさまの姿をさがし

「どうしたの、マリア。急に号泣始めたのです。」

無垢な笑顔のままのレナスさまと扉の向こうからひょいと現れたカルーアさまが、不思議そうに問いかけてくる。

あの光景はまた目の錯覚なのだろうか。

「あ、あの陛下が化け物に襲われているように見えるんですけど。」  
私が恐る恐る指差した先には、何やら魔方陣を纏つた口だけの化け物が陛下にかじりついていた。

「あー、あれですか。まあ大丈夫でしょう。」

「どうやら日の錯覚ではなかつたらしい。

いやいやいや、全然大丈夫じゃないでしょ。

「心配しないで。マリアのことは決して襲わないわ。」

「え、そんな馬鹿な…。」

「どうみても危険生物だ。陛下を食べたら間違いなく私たちに襲いかかってくる。」

「だつて私が召喚した魔法生物だもの。」

天使の笑顔のままでレナスさまは言った。

「へ…？」

「凄いでしょ。獰猛で忠実な私の一番の召喚獣ベグドールよ。」

一瞬頭が真っ白になる。

テンシサマガナニカヨクワカラナイコトヲオツシャツテル。

「あの生物は王妃殿下が召喚されたと…？」

「うん。でも王妃殿下って呼ばれたくないなあ。親しみを込めてレナスさまって呼んで？」

「えつと、レナスさま、で何故陛下が襲われているんでしょうか…。」

「だつてむかつくじゃない。あの野蛮人。自分が先にマリアと話すつて聞かないのよ？」

ハイ？

天使の笑顔は変わらず美しい。

「えつと…。へ、陛下を助けないと…。」

「ふ、安心してくれマリア。これしきのこととでやられる俺ではない。あと、俺のことは親しみを込めてクオンと呼んでくれ。」

上半身を化け物に食べられた状態で器用に喋り出す陛下を茫然と見る。

「レナス、お前は化け物で俺の足止めをして先手を取つた気らしいが甘いぞ。所詮平和ボケの聖姫の発想などそんなものだ。俺は勇者、勇者とは戦つもの、戦う俺の姿こそ最も美しくかつこいいのだ。貴

様の召喚獣を打ち倒す姿を見て、マリアは俺に一目ぼれするに違いない。」

何を言つてゐるんだこの人は。

ガジガジ、魔法生物に噛まれながらわけがわからぬことを高らかに宣言するクオンさま。

「あー、もう煩いわね。マリアとお話できないじゃない。止めを刺しちゃいなさいベグドール！」

「ええ！？ ちょっとつ！」

レナスさまの口から出た物騒な台詞に驚愕する。

召喚獣は大口を開けクオンさまを噛み砕こうとする。

これから起こる惨劇を想像し思わず悲鳴をあげかけたとき。

「来い、レガード！」

クオンさまの声が聞こえ、召喚獣の体がはじけ飛ぶ。

召喚獣の体は光となつて消えうせ、後には剣を片手に立つクオンさまがいた。紫銀の幻想的な髪に煌々と光る赤い瞳。その姿は戦神そのもので、見るものに戦慄と美しさを植えつける。バケツまるまる一杯取れそうな唾液さえ被つて無ければ。

「どうだい、見てくれかい？ マリア。」

髪をふあさーっと（濡れてるので本当はべちゃりと）かき分け私に視線を送つてくるクオンさま。

「は、はあ…。」

事態についていけない私にはそう答えるしかない。

「ちつ、しぶとい奴め。」

レナスさまから舌打ちが聞こえた。歪んだ顔も天使のように美しい。ちょっと邪悪だが。

「どうか、何だらうこれ。さつきから何なんだろう。」

「あの程度の奴で俺が倒せると思つたか？ おろかなやつだ。まあ、間抜けなエセ聖女どものペットはあの程度が関の山だらうがな。」

「うるさいわね、野蛮人。あんたみたいな粗暴な奴が、私の可愛いベグドールを馬鹿にするなんて万死に値するわ。それ以上に、私の

「マリアを変な目で見たのが許せない。今日こそ、アマテリアの地下に埋めて、そのまま冥府に直通便で送つてやるわ。」

「やれるものならやつてみる。貴様こそ、お前らが信じる天国とやらにかつ飛ばしてやるから喜べ。そして安心しな。マリアは俺が幸せにする。」

「ものすごい勢いでいがみ合いだす一人。あれ、おかしいなあ……。私の目の前にいるのはクオンさまとレナスさま。世界を救つた末に結ばれ、奇跡の国を作り出した恋人たち。お互いを深く愛し合い、世界にも希望をもたらす最高の夫婦。世界で最も美しい男と女二人が並び立つ姿は、もはや神の奇跡といつべきカッブル。

なのに、目の前で一人は睨みあい、拳を握り、いがみ合いながら猛獸のように牽制をし合つていて。

あれ、世界で最も深い絆を持つ夫婦はどうにいったの？

それとどこのどこの私の名前が出てくるのは何故？

「やれやれ、今日ぐらいは喧嘩しないよ」と、全然ダメでしたね。」

「

背中からカルーアさまの声が聞こえた。  
振り向くとソファーにどつかり座り込み足を投げ出したカルーアさまがいた。

え、何この人。態度悪い……。

その姿には今までの紳士的な青年の面影はどこにもなかつた。

「あのお……なんなんですか。これ……。」

私は思わず足技の応酬で牽制し合う国王夫婦を指差してしまつ。

「見てわかりませんかー？わが国の国王さまと王妃さまですよ。」  
ぱたぱたと手で自分を仰ぎながら、だらけた姿勢でいつてくるカルーア……さま……。

「でも国王夫妻は、お互に深く愛し合つてゐて……。世界で最も仲の良いカップルだつて……。」

二人の様子は、もうお互い殺意ありありの状態だ。喧嘩するほど仲が良いなんてレベルではない。

私の問いかけをカルーアさまは鼻で笑う。

「はつ、あんなの私が宣伝用に作った大嘘ですよ。ああー、大変だつたなあ。この一人を仲良し夫婦だと国民に認識させるのは。お陰で王と王妃の間は厳重警戒態勢だしかつたるくて仕方ないですよ。はー、本当だるつ。」

「一体なんなのだこれは…。」

「あの…、私はなんで呼ばれたんでしょうか。」

「ああー、それですか？」

と態度が悪い笑顔のままカルーアさまが何か続けようとしたとき、ふいにぐいっと腕が引っ張られる。見ると、いつの間にか横にいたレナスさまが満面の笑顔で私の腕に腕を絡めていた。

「マリアはね、私の寵姫なの。マリアの身も心も私のものよ。」

「お、王妃さまの寵姫…？」

なんじゃそりや。王妃さまの寵姫なんて、そんなもの存在するのだろうか…。

そう思つていると、後ろから手が伸び引っ張られ誰かに抱きこまれる。誰かというか、この場にいるのは三人なので誰だかまるわかりだ。

「何を言つ、マリアは俺の寵姫だ。俺と愛し合つと運命で決まつているのだ。」

いや、確かにそれは正常だけどなんかおかしい。といふかこの状況がおかしい。

「まあ見ての通りですよ。」

「いいえ、わけわかりません。」

「もういい加減仲良くさせるのも限界に来てたんですが、離婚するとアマテリア崩壊の危機ですからね。悪あがきに公妾でも募集してみたら、なんと二人ともあなたに一日ぼれです。一人ともあなたが寵姫になつてくれるなら、夫婦生活続けてくれるそうですから。あなたが一人の寵姫になつてくれればアマテリアも安泰です。この国のためにがんばつてくださいね~。」

手をひらひらさせて投げやりに言つ」の国の中相。

カルーアさまの言葉が耳から突き抜けていく。え、ちょっと、意味がわからない。

「あ、あのちょっと離していただけませんか。」

クオンさまとレナスさまに拘束されて動くことすらまならないのでお願ひする。

「「ええー。」」

「人はこんなときだけ一緒に不満げな顔をしたが、もう一度「お願いします。」と言うと離してくれた。

「ちょっとこちらに来ていただけませんか。」

私はだるそうにしているカルーアさまの腕を引っ張る。

「はあ、やれやれ。なんですか？」

態度が悪いがなんとかついてきてくれた。

私はレナスさまとクオンさまから離れた柱に隠れると、

「無理です！無理です！そもそも公妾応募の件から誤解なんです。お断りさせてください。」

全力でカルーアさまに拒否の意思を伝える。

もういろいろと無理だ。絶対無理だ。いろいろと状況がおかしかったり、責任が重過ぎたり、そもそも未だわけがわからなかつたり、無理がありすぎる。とにかく無理。無理。

「おやおやー、困りましたねえ。国家の危機なんですよ。何とかしてもらえませんかねえ。」

「いや、本当に無理ですから。実は公妾への応募も母親が勝手にしただけなんです。そちらからお断りしていただけなければ、こちらそれとなく言つ予定だつたんです。」

「はあ…、クオンさまもレナスさまもがっかりしてますよ。」

カルーアさまの指差す方を向くと、ぱちり聞こえていたらしく悲しそうな瞳で一人が見てくる。子犬みたいに。

うつと心が痛むが、こちらだってわけがわからないものに巻き込まれかねない人生の瀬戸際だ。結婚式のときは比にならないぐら

いの努力で気持ちを立て直す。

ここであきらめたら私の人生の平穏が危ない。もしくは人生そのものが危ない。

「「、「ごめんなさい。他に良い人が必ず見つかると思います。」「

「はあ、仕方ありませんねえ…。」

ほつ…、良かつた。あきらめてくれたようだ。

「それではこれ、お願ひしますね。」

ぽんと渡された紙束を私は見る。公妾破棄の契約書とかだろうか。と私は見てみるが、そこに書かれているのはたくさんの数字だった。それに神晶石やら朱銀やら、超高価な鉱石の名前が連ねられている。正直、よくわからない。

「なんですか？これ。」

「何つてあなたのための後宮の今までの建設費用ですよ。あなたがいなくなるからにはすべて無駄になってしまいますからね。しめて2兆コルダになります。これを払えば、あなたも晴れて公妾を辞すことができますよ。」

「ふほつ」

思わず吹き出す私。

「な、なんですか。その金額。」

「いやー、龍姫さまを迎えるということでクオンさまもレナスさまも張り切りすぎましてね。国家予算を大規模に投入されましたよ。」

「ていうか！な、なんで私が払わなければいけないんですか！」

私は必死で抗議する。そんなわけのわからない話があるか。

「おや、契約書を読まれてないんですか？公妾を10年以内に自ら辞す際は、国家があなたにかけた費用を返済すると書かれていたでしょ。」

「ええ！？って、そもそも私は申し込んでないからそんなもの読んでないんですけど！母さまが勝手に申し込んだだけです。」

私の反論は反論するが、カルーアさまの嫌な笑顔は変わらない。

「でもこれはあなたのサインと押印ですよ。」

「はあ！？」

そう言つてカルーアさまが示してきたのは、紙束の後ろにある契約書だつた。

見てみると押印はよくわからないが、サインは私の筆跡だつた。  
「な、なにこれ…。」

「あなたのお母さまが、『本を読んでるとき新刊が届いたからサインしてつていつたらあつたり何も見ずにサインしちゃつたわよ。おほほ。』っておっしゃつてしましましたよ。」

「母さまああああああああああああ」

まつたく記憶がないが、騙されたことに気づく。

「た、たとえそれでも無効です。自分の意思で契約を結んでないんだから不当契約です。」

「構いませんよ。訴えてみますか？アマテリアでの裁判で私に勝てるどお思いでしたら」自由にござります。」

「ぐぐつ…。」

「あ、国外で訴えても同じですよ。世界最大の国家の宰相の力を全く見ないでくださいね。」

「……」

私はもう沈黙するしかなかつたが、さらに宰相の追い討ちがかか  
る。

「まあ、今の子爵家の資産を全部売り払えば100分の1は返せるかも知れませんね。まああなたの母さまはそんなことしないと断言しますけど。寵姫として王と王妃の仲を取り持ちながら、贅沢な生活を送りますか？それとも19歳にして世界一の借金持ちになりますか？」

宰相の言葉はまだ続く。

「もちろんあなたが2兆コルダの借金を返せるなんて思つてもいませんが、努力はしてもらいますよ強制的に。私のすべての力を費やして、あなたの体、人生から出来うる限りのお金を捻出してみますよ。人間らしい生活が送れるなんて思わないでくださいね。」

田の前にいるのは初対面に会った紳士な英雄の面影などまったくなかつた。鬼よりも悪魔よりも邪悪な存在が目の前にいた。

そして悪魔は微笑みをやいた。

「さあ、どうします……？」

田の前に涙田の一人がふるふる震えながら私に向き合つていて、「ごめんね、マリア。がんばつてこいつと仲良くとはいからなくとも、きりきりまでがんばるから出て行かないで。」

祈るような田で私を見つめてくるレナスさまは本当に可愛らしい。「すまない、マリア。俺もこいつとはいからなくともしがたいものがあるが、マリアのためなら血反吐を吐く覚悟でがんばつていいくつもりだ。俺と一緒にいて欲しい。」

そう言ひ真剣な顔で言ひクオンさまの姿は、莊厳でとても美しかつた。

そして私は後ろの悪魔に邪悪なオーラで肩つかまれながら返事した。

「セ、セイイツパイガソラセテイタダキマス。」

そして私は寵姫になった。

## 4羽（後書き）

えー、とつあえず書きあがつたので後ほど修正していくかと思ひます。

3羽も修正さぼつてるので修正せねば…。

寵姫のおじいとはあまり更新できないこともあって、1話1じとにある程度区切りがつくとこまで書くと決めてこるのでですが、どうなうでしょう。

こ気味よく短く更新したほうが効率はあがりやうなのですが、変な場面でとどめて長いこと更新しなくなつてしまつたりしそうでどうするべきか迷っています。

一発ネタちつくにはじめたシリーズですが、カルーアだけキャラが固まつてクオンとレナス、主人公はまだやふやだつたりします。サブキャラ増やしつつそれぞれのキャラを固めていけたらなあと思います。

パサリツ

柔らかな毛布をひるがえし、私は上半身を起こす。全身には変な汗が滲み出していく、動悸が激しい。

「ふう、変な夢みちやつたなあ。」

私は枕もとの眼鏡を探して探す。

「あら、どういう夢を見られたのですか？」

「いやいやー、お恥ずかしながら、王宮で龍姫なんてありえない役目で迎えられる夢など見てしまいました。少女趣味もいいところですよね。年甲斐も無い。」

「そんなことあつませんわ。王宮ロマンスはいつも女の夢ですもの。」

「まあそういう趣向の人もいますねー。」

私は会話しながら、探し当てる眼鏡をつける。

ふむ…。

「で…、あなたはどなたで、こゝはどこでしようか…。」

「私はマリアさま専属の侍女のヘルダで、こゝはマリアさまのために用意された後宮でござります。」

夢ではなかつた。

\* \* \*

「ヘルダさんって英雄ではないですよね。」

「そうですね。英雄ではありませんが、クオンさまとレナスさまの信頼を頂きマリアさまのお世話を担当することになりました。よろしくお願いしますね。」

「つこつと優しく微笑みながらお茶を入れてくれる。

すらりとした長身に肩で綺麗に切りそろえられた茶色の髪、立ち

振る舞いは優雅でとても綺麗な人だ。落ち着いた優しい雰囲気を持っている。

クオンさまとレナスさまのことだから、侍女にまで英雄を配置していないか心配してたのだがそんなことはなかつたらしい。普通の人が傍にいてくれることに安堵する。

「マリアさま少しお時間をよろしいでどうか。他の侍女たちも紹介したいので。」

「あ、はい。構いませんけど…。」

自分の家の侍女は、お手伝いさんみたいな感じだったので、自分専属の侍女がいるだけでも恐れ多いのに、まだ侍女がいると言われ正直かなり戸惑う。

「あなたたち入ってきなさい。」

エルダさんがパンパンと手を打ち鳴らすと、5人の侍女が頭を下げて入ってきた。

「失礼します。」

声を揃えて言つた侍女たちが頭を上げたとき私は硬直した。

「マーサです。」

「クリスです。」

「リュークです。」

「ミカエルです。」

「ライナです…。」

「知つてます…。」

次々名前を告げてくる侍女たちにそう思つた。何故知つてゐるのか。

それは5人とも5人が英雄だったからだ…。

まさか英雄が侍女をやつているとは…。いや、門番の一人を見た時点できちんと予想できたことだったが、エルダさんが普通の人だったのですっかり油断していた。

正直、時代の端っこで静かに生きてきた人間としては、この英雄ラッシュは辛いものがある。

「わあ、この方がマリアさまなんですねー。」

「クオンさまたちのいけに...龍姫に選ばれるなんて、かわいそ...幸せな方です~。」

「マリアさまのこれから心労を少しでも少つため、ひとつおきのお茶をいれますね。」

「あー、ずるい。私がやるもん!」

「クッキー準備しました!。」

キャピキャピ女学生みたいに騒ぎ出す世界に名だたる英雄たち。一部不穏な台詞が聞こえた気がする。

「マ、マリアベルです...。ご存知かもしけませんが、よろしくお願ひします。」

ペコリ

一応の礼儀として挨拶する。

それを見て、侍女五人は顔を見合せると何故か「わやーっ」と悲鳴をあげて、ヒソヒソ話をはじめめる。

「なんか、そそるよねー。」

「クオンさまとレナスさまの気持ちが少しわかります。」

「うんうん!」

「邪な心を抱くと、命が危ないですよ。なんせあの一人に手を付けられてるんですから。」

「かわいい...。」

呆気に取られて見ていると、手を打ち合させてエルダさんが止めに入ってくれる。

「こりこり、龍姫さまに失礼ですよ。申し訳ありません、マリアさま。この子達は侍女の訓練を受けてから口が浅いものでして。」

「は、はあ...。」

近頃、英雄たちに対するイメージが崩れつつある。自分が読んだ本の中では、賢く礼儀正しい人格者たちだったのに...。

「マリアさまの朝食の準備をするわ。マーサとライナはマリアさまの着替えの手伝いを、クリスとミカエルはテーブルと食器を、リュークはお茶の準備をしなさい。」

5人にキビキビと指示を出すとエルダさんは部屋から出て行く。

「はあ～」

「どうしました？ マリアさま。」

私がついた感嘆のため息に、侍女のマーサさんが不思議そうに聞いてくる。

「いやー、エルダさんって凄いなって思つて。英雄の人たちにあれだけきちんと指示を出して。私だつたら氣後れしてとてもじやないけど無理です。」

普通の人同士として頼りにできそうだ。

「あー、マリアさまは知らないですよね。」

「うん…。一般人はほとんど知らないはず…。」

「え、どういいうこと？』

「エルダさまは最終決戦こそ参加されてませんが、その時一人で城の守護を担当されていたんですよ。1対多での戦闘能力では、英雄の中でもレナスさまに次ぎますから。エルダさまが城で睨みを利かせてくれたお陰で、悪魔たちの奇襲を気にすることなく最終決戦に集中できたんです。』

「それでも、100体の悪魔が城の方に来たらしい…。」

「全部、上陸前に倒しちゃつたらしいんですけどね。悪魔たちの血が飛び散る中、踊るように優雅に剣を振るつさまはとても美しかったそうです。」

「一つ名は双剣の鬼姫…。」

「あははは…。」

普通の人なんていなかつた…。

「マリアさま、衣装を準備しました。」

そう言つて着替えを手伝おうとしてくれる一人に「あ、自分で着替えられるので大丈夫です。」と言つ。

「そうですかー。では、お手伝いが必要なときはお申し付けください。」

意外とあつさり引いてくれた。

衣装を渡され、早速それを着がえ…。

「これ…なんですか？」

「水着とウサマ///です。」

私に手渡されたのは、セパレートの白色の水着とウサマ///だった。普段着るどいろか、人生におけるひとあるのかすり落しい格好だ。

「なんでこれなの…？」

私は恐る恐る聞いてみる。

「クオンさまとレナスさまが…。」

「お二人の意見を総合したところ、これになりました。」

「なんですか！」

私は思わず叫ぶ。

「クオンさまの露出度が高い服という直球の願望と、レナスさまのマリアさまをペットのように愛でたいという少々特殊な嗜好を、白いウサギといつテーマの元」

「解説しなくていいです。」

「そうですかー。では、じづれ。」

「じづれって言われても…。私は手渡された水着とウサマ///を見つめる。

「着ません…。」

むしろ、着れません。二十歳にもなつてこの格好は無理です。といふか二十歳じゃなくとも人間としてダメだろ？、この格好は。

「ええー、似合つと思つますのに。」

「残念…。」

「もつと、普通の服はないんですか？」

「普通ですかー。」

「マーちゃんは少し思案するど。」

「イヌマ///とかですか？」

「全然普通じゃないですーもう、自分で選びますー。」

私はやたら豪華なドレスがたくさん入つているクローゼットの中

から、なるべく地味で装飾の少ないものを取り出して身に着ける。勢いのあまり人前で着替えてしまつたが、あまり考へないようにする。

それから食事をすることになつた。

「今日はクオンさまとレナスさまは公用で」「一緒に来ません。」  
　　「こう侍女さんたちの言葉にホッとする。むしろ食事も一緒に取ることになつてたのか…。

朝食だというのに、料理は今まで食べたことないような高級料理のフルコース。このお皿に山盛りつままれてているのは、一生に一度は食べてみたいねえと家族と話した幻鮫のキャビアではないだろうか……。侍女さんたちは並んでこちらを見守っているので非常に食べにくいい……。

「あの… ケネスもおとレナスもおこてなんであんたは仲が悪いんですか？」

向こうに行かれてくださいなんてとても言えない小市民な私は、とりあえず会話でもして気まずさを振り払おうと試みる。聞いている内容は切実だが…。

「うーん、そうですねえ。もともとアルサルドとラマーナは、そんなに仲が良くなかったんですよ。表向きは友好国なんですが、お互い相手を敵視していて。」

「クオンさまとレナスさまもその典型例ですけど、お互い国一番の勇者と聖姫ですから、特に敵愾心が燃え上がつたらしく子供のころから小競り合いを起こしてたみたいですよ。」

は はあ

アルザルドの辺境に住んでた私だけど、ラマーナと仲が悪かつた  
なんて全然知らなかつた。

۱۹۰۰ء

「うん…私とマーサはアルザルド出身の戦士…。クリス、リューク、ミカエルはラマーナの聖女。」

そう言つライナさんの言葉を、クリスさんが繋ぐ。

「最初はどう寝首をかいてやうつかと思いましたわ。」

口に手を当て上品に言つてゐるけど、内容はとてもえげつない。

「私たちもいつか決闘を申し込んで、正々堂々倒してやうつと考えてました。」

「うんうん」と同意するライナさん。

「あれ…、でも今は仲が良いんですね。」

そこには希望を見出したい。クオンさまとレナスさまも、いつか仲良くなってくれるという希望を得るという意味で。だが、それも続くミカエルさんの言葉で絶望に叩き落される。

「だつて、クオンさまとレナスさまが暇があれば世界規模の戦争をしようとするんだもん。部下の私たちまで争つてたら世界が滅びちゃいますよ。」

あはは、とあくまでも明るくいミカエルさん。

「だから、せめて私たちだけでも仲良くすることにしたんです。でも、最近のクオンさまとレナスさまの仲はどうじん悪化の一途を辿つていつて。」

「私たちでなんとか市井へ被害は及ばないようにしてたんですけど、それも最早限界でした。私たちは真の最終決戦があこることを覚悟していましたわ。」

「うん…ローレシアンとの戦いを超える…世界を一分した戦争…。」  
「だからマコアさまが、いけに…龍姫として現れてくださいて私たち感謝してるんです。」

「この国の、いえこの世界のためにがんばつてくださいね。」  
氣まずさを取り払うために行つたはずの会話だったのに、聞いていく度にどんどん食事の味が感じられなくなつていく。

今、世界の命運は英雄たちの手から、私の肩に預けられたらしい。

なんだあああああー！

星獣、それは聖女の守護獣としてこの世に生を受ける神聖なる獣だ。

聖女一人に付き生涯一匹だけ存在し、聖女の身を守り共に戦うパートナーとなる。幼いころより聖女とともに生活し、その間にある信頼は親や恋人よりも篤いと言われる。

星獣は命がけで聖女を守り、その願いのために力を尽くす。

聖女と星獣、運命で結ばれた二人の絆はどんなものよりも固く結ばれている。

私はベルスキー。レナスさまに仕える誇り高き星獣である。幼いころより、レナスさまと共にあり、その身を支えてきた。レナスさまの一番の側近であると自負している。

強く気高く美しい。天使の顯現と呼ばれ、もつとも神聖なる聖女である聖姫にすでに幼くして選ばれていたレナスさま。そんなレナスさまの星獣に選ばれたのだから、私自身の力も伊達ではない。

歴代の星獣の中でもっとも速いスピードを持ち、その動きは高位悪魔ですら目にとらえることを許さない。力も現存する星獣の中では最高、巨人の一撃すら受け止めて見せる。魔力も高い。並大抵の魔術師では私には敵わない。

でも私が何よりも誇りにしているのは、レナスさまへの忠誠心だ。レナスさまのためなら命を投げ出しても惜しくない。陳腐な言葉だが、本当にそう思える。

レナスさまを守り支えるためにこそ私は生まれてきたのだ。

後宮の庭を散歩していると犬がいた。

犬だ。しかもふつかふつかのもつふもふの金色の気持ちよさそうな毛並みの犬だ。

マリアベルが近づいてもお利口「そうに座つてじつとしている。

それを見てマリアベルは、飛びついた。

「犬だー！」

そのまま犬の首にしがみつくと、抱きついたまま顔をすりすり寄せる。

「わー！ もつふもふーすゞーいもつふもふーおとなしくてお利口だー！」

マリアベルがいくら抱き着いても犬は暴れることなくおとなしく受け止めてくれる。

マリアベルは犬が好きだった。どうしようもないほど好きだった。田舎暮らししながらも動物には慣れていたが、犬は別格だった。

牧羊犬や農家の番犬などを見てずっと飼いたかったが、母さまが犬は家畜の管理のために飼うものと認識していたので、牧畜をやつていらない子爵家では飼わせてもらえなかつた。だから侯爵家の一員になれた暁には、犬を飼つてやるなどと密かに計画をたてていた。「はじめまして、マリアベル殿。お話はレナスさまより聞いております。」

夢中で抱き着いているマリアベルの横から、低い男性の声が聞こえてくる。

飼い主の人かと思ってマリアベルは慌てて立ち上がる。

「ん、ごめんなさい。久しぶりにわんちゃんを見たものだからつい。

」  
顔をあげて飼い主の人あいさつをしようとしたが、はたと気づく、飼い主らしき人はどこにもいない。

「あ、あれ…。」

「いえ、レナスさまの大切な人であるマリアベルさまに気に入つて頂けるのは喜ばしいことです。」

あれ…。犬が口を開いてて、さっきから声がそこから出でているよう見える。

「ただ、私は犬ではなく星獣です。」

呆然とするマリアの前で、金色の毛並みを持つ犬は自己紹介をする。

「『あいさつ』が遅れて申し訳ありません。私の名前はベルスキー。世界で最も貴き聖女レナスさまを守護する星獣です。」

犬は前足を上げると、それは見事な礼をしてみせた。

\*\*\*

喋れる犬の登場にマリアはどん引きするかと言えば、そういうことはなかつた。むしろテンションが上がりまくつた。だつて喋れる犬といえば、ファンタジー、犬好きの憧れである。

「それじゃあ、ベルスキーさんは魔法も使えるんだ。」

「はい、特に風と火の魔法を得意としています。」「すごーい！」

「はは、それほどでもありません。」

ベルスキーは風と火を利用した簡単な魔法（小さな火の竜巻を作る）を見せて、マリアベルを感心させる。マリアベルの反応が近所のお手をする犬をみたときとまったく同じなのは秘密だ。

「私の最も誇るのはスピードですが、力も優れています。マリアベル殿ぐらなら軽く持ち上げられますよ。」「えっ。」

その言葉を聞いてマリアベルの表情が固まる。もしかして怖がらせてしまつただろうか。ベルスキーはマリアベルを安心させようと声をかけようとする。

しかしマリアベルは怖がっているわけではなかつた。固まつた表情がほどけていくと、目がきらきらして頬が紅潮はじめる。

「じゃ……じゃあもしかして、わ……私を乗せて走つたりとかできますか……？」「は……はあ。それぐらいなら軽いものです。……乗つてみますか？

61

たゞたゞしい言葉に、異様なまでの熱氣を感じ取りベルスキーは誘い出されたようにマリアに聞く。

「いいの！？」

犬に乗つて走る。それは乙女の夢のひとつ。しかもベルスキーは物語に出てくるような金色の長毛を持った美犬。これに憧れない女子がいるだろうか。

「ど、どうぞ。」

そういうつてベルスキーは背中を差し出す。

マリアベルは恐る恐るベルスキーの背中にまたがる。潰してしまわないだろうかと一瞬不安になるのは仕方のないことだ。最近、寵姫の豪華な食生活のせいで体重が気になるわけでは決してない……。

ベルスキーの背中にまたがつてみると潰れる気配なんて全くなく、それどころか馬みたいにしつかりと支えられる。出来るとは聞いていたが、一抹の不安があつたマリアベルは安心する。

「ゆっくり走りますが、落ちないように背中の毛を掴んでいてください。」

言われたとおりにすると、柔らかいさりさりの毛が手に触れる。さわり心地が良すぎる。そしてベルスキーが地面をけると、周りの景色がゆっくりと流れ始めた。

頬に風を感じる。自分のために優しく走ってくれるのだらう。振動もまったく言つていいくほど無い。

「うわあ、すごい。すごいよお～。ベルスキーさん。」

マリアベルは珍しく子供みたいにはしゃぐ。

本当に夢みたいだ。喋れる犬、自分を乗せて走れる犬、ふわっふわでつやつやの金色の毛並み。星獣であることなんてまったく忘れている。マリアベルがベルスキーを見る目は恋する乙女のようにだった。

「ははは、喜んでいただけて私も嬉しいです。」

ベルスキーも紳士的に笑顔を返す。

マリアベルはふと流れる景色に向こう、レナスの姿を見つけた。

「あ、レナスさまだ。」

遠くにいて表情は見えてないが、こちらを見たまま突つ立つている。

「本当ですか。あちらに向かってもよろしいですか？」

「あ、ごめんなさい。レナスさまに会いに来たんですよね。私つたら迷惑おかけしちゃって。」

「いえいえ、マリアベルさまへの挨拶もありましたので全然がまいません。むしろ私も楽しかつたです。」

「そうですか。よかつたあー。」

うふふっ、和やかに笑みを交わし、レナスのいる方向へ向かう二人。

そしてたどり着く。

「レナスさま、こんにちは。」

「レナスさま、ご機嫌麗しゅう。」

二人はそろつて挨拶する。

「あり、マリア、ベルスキー。凄く楽しそうだつたね。」

レナスも笑顔で二人の挨拶に応じる。

「はい、ベルスキーさんは凄いです。私をのせてくれるんですね！すごく賢いし！もう本当に素晴らしいわんちゃんですね！」

いつになくはしゃいだ様子でベルスキーに抱き着きながらしゃべるマリアベル。

「ははは、星獣なんですけどね。」

ベルスキーも暖かい笑顔で応じる。

「そう、そんなに気に入ったの。良かつた。といひでちよつと、ベルスキーと一人で話したいことがあるの。大切な話だからマリアはちょっと後宮に戻つてくれる？」

レナスはそんな二人を見て、笑顔のままで言った。

「あ、そうですよね。ごめんなさい。」

二人は国を治める聖なる王妃と、それに仕える星獣なのだ。やはり他人には聞かせられない重要な案件があつたのだろう。マリアベ

ルは少し自分のはしゃぎっぷりを恥じた。

「いえ、気にしないで。またね、マリア。」

「あ、はい。ベルスキーさんまたね。」

でも結局我慢できず、ベルスキーのほうを向き手を振り、マリアベルは去つて行つた。その姿を、レナスとベルスキーは笑顔で見送つた。

\*\*\*

「それでレナスさま、大切な話とは。」

ベルスキーは笑顔を、きりつとした表情に戻し自らの主人に問うた。

「そうね、まず死ね。」

ドンッ

レナスがそういう瞬間、ベルスキーの今までいた地面が爆ぜた。間一髪、横に移動したベルスキーをレナスが絶対零度の瞳で睨む。マリアベルを前にしていたときの笑顔はどこにも無かつた。

「レ、レナスさま…！？」

ベルスキーは突然と豹変した主人を見る。

「飼い犬に手を噛まれるといこうとはこいつことかしら。」

「わ、わたしは星獣ですが？それに何もしていませんよ…？」

戸惑うように言うベルスキーに、レナスは天使の顔をゆがめ地獄の淵から這い出るような声を出す。

「なにも、してないですって？よく言つわね。マリアと一人つきりで楽しそうに話して。マリアの笑顔を独り占めして。マリアを自分の体に乗せて庭を楽しくドライブ？」

最強の聖姫の放つオーラに、大気が震え地面が揺れる。

「獸風情が小賢しいことを考へるじゃない。さぞかしマリアの太ももの感触は気持ちよかつたでしょうね…」

「レ、レ、レナスさま落ち着いてください。私は下心なんてまったく

くありません！」

「下心があるから私はつまといかないっていうの！あなたのほうがうまくマリアを喜ばせられるつていいたいわけ！？それは私に対する挑戦状ってわけね！」

ベルスキーはあくまでレナスさまの大切な人であるからこそ、マリアベルに喜んでほしかつただけだつた。そしてその純粹な気持ちと犬に似た姿は大きな勝利を呼び起こした。

後宮ではいまだ誰にも見せなかつたマリアベルの全開の笑顔。だが、それは大きすぎる勝利だつた。

その笑顔を遠くから見たレナスの嫉妬はとどまることをしらない。もはや言葉が通じる状態ではない。

「星獣が主人を裏切つた罪、死をもつて償うがいい。」

完全に戦闘モードに入つたレナス、両手に巨大な魔力が膨れ上がる。

「あの…、レナスさま…、話を聞いてくだされ…。」

ベルスキーは涙目になつて死を覚悟した。何が悪かつたかはわからぬ。だが、敬愛する主人に今日、この場所殺されそうなことは間違ひなかつた。

「ベルスキーさん！ベルスキーさん！」

その時、てつてとマリアベルが再びこちらに走つてくる足音がした。

瞬時に、レナスの放つプレッシャーが消える。

「あ、レナスさまとまだお話してたんだ。」

まだマリアベルが離れてから5分ほどしかたつてないはずだが、楽しみなことを控えた子供のように時間間隔がくるつてるのだろう。マリアベルはすぐにレナスたちのもとへ戻つてしまつた。

「『めんなさい。』

一言謝ると、マリアベルはまた去つて行つた。

「ゴゴゴゴゴゴゴ」

一瞬でレナスに闇牙が戻り、無言で手刀を構えベルスキーに近づ

く。

「だから、誤解ですから…。落ち着いて…。」  
じりじりと後ろに後退するベルスキー。またベルスキーに命の危険が迫る。

「ベルスキーさん！」

再び、マリアベルの声が聞こえた。

鬪牙が消える。

「ボールが見つかったんです。ボール！」

戻ってきたマリアベルはさらにテンションが上がっていた。手には握りこぶし大の丸い球がにぎられている。  
そしてまだレナスとベルスキーがいるのを見てしょんぼりした。

「ごめんなさい、レナスさま。」

「いえ、いいのよ。」

すぐに笑顔を張り付けてマリアに答えるレナス。

「ベルスキーさん、レナスまと話が終わったらボールで遊びませんか？」

「え、ええっと。」

ベルスキーは答えに詰まる。確実にそれを受けたは、自分の寿命はレッズゾーンに突入する。いや、もつすでに半ばつきかけているのだが。

「やつぱりボール遊びみたいなのはしませんか。ベルスキーさんかしこいですもんね。」

「いえ、そういうわけではないのですが。」

ベルスキーは戸惑うように、レナスを見上げた。

それを見て、マリアベルもレナスの方を見る。そしてレナスこそがベルスキーの主人だったことを思い出す。

「レナスさま、私、昔から犬とボール遊びするのが夢だったんです。レナスさまからもベルスキーさんにお願いしてくれませんか？」

普段は見ないマリアベルの上田使い。その威力はレナスにとって絶大だった。

「やりなさい、ベルスキー。」

「は、はい…。」

大丈夫なのだろうか。と思いつつもベルスキーは主人の命令に承諾する。

「わあ、ありがとうございます！レナスさま！」

マリアはレナスの手をぎゅっと握り、花がほころぶような笑顔を見せた。それは初めて自分に向けられた満面の笑み。レナスは顔を真っ赤に染め何もいえなくなってしまう。

マリアはマイペースに硬直させたレナスの手を離し、ベルスキーの方を向き直り笑顔で言った。

「それじゃあ後で遊びましょうね。」

「わ、わかりました。」

「絶対ですよ？」

「は、はい。」

「レナスさまからもお願ひしますね。」

「え、ええ。」

そう言つてマリアベルは本当に去つて行つた。

その後、ベルスキーの処分は一時保留になり、なんとか命の危機を脱すことができた。

\* \* \*

私はベルスキー。レナスさまに仕える誇り高き星獣である。

幼いころより、レナスさまと共にあり、その身を支えてきた。レナスさまの一番の側近であると自負している。

私が何よりも誇りにしているのは、レナスさまへの忠誠心だ。レナスさまのためなら命を投げ出しても惜しくない。陳腐な言葉だが、本当にそう思える。

レナスさまを守り支えるためにこそ私は生まれてきたのだから。だが…。

「ベルスキーさん、くつきーたべます？」

「は、はい。」

「ほり、あーん！」

レナスさまが愛する女性が、手にくつきーをもつて差し出してくる。私は、それを口に入れる。

「マリアは本当にベルスキーのことが大好きね。」

レナスさまは今日も笑顔を張り付けてその景色を見つめる。

「はい、大好きです。」

そう言つて女性が私に抱き着いたのを見て、レナスさまの瞳に殺意が灯るのが見えた。

「明日もベルスキーさんを連れてきてくれます？」

「ええ、いいわよ。マリアが望むならいつだって。」

あれから、レナスさまはマリアさまの点数を稼ぐために私を利用することにしたらしい。しかし、理性ではそう判断しても感情は納得できていならしい。

一人つきになると死なない程度に魔法が飛んでくるようになつた。

そして私とマリアさまが仲良くすると（とこよりマリアさまが一生懸命私を構い倒そつすると）すさまじい殺意と嫉妬が籠つた視線が飛んでくる。

私の胃はキリキリと痛みを訴えるようになつっていた。最近、毛並みも悪くなってきた気がする。

私は星獣だ。

レナスさまのためなら命を投げ出すことも恐れない。

だが、主人に女性関係の嫉妬で殺されるのと、精神的なストレスで病気になつて死ぬ未来はとても受け入れがたいものに思えた……。

クオンさまとレナスさまは遠国の式典に呼ばれて留守になつてい  
た。

「お茶会ですか？」

逆に何故残つてゐるのか問い合わせたくはないけど、神様にはひつそりいなくなるようにお願いしておきたいランキング一位のカルーアだけは残つていた。時に穏やかに微笑んでるように細田には、油断ならない胡散臭い表情を浮かべている。

「若い貴族の令嬢方からのお誘いでしてね。いい加減断るのが面倒……部屋にこもられつきりのマリアさまの良い息抜きになるのではないでしょうかと思いまして。クオンさまとレナスさまがいな隙にさつさと行つてもらえると助かるんですけどねえ。」

絵文されると本音を漏らしてゐるで、  
きり本音の方とつながつてゐるし。」

そうお茶会などに参加して息抜きになるわけがない。そもそも私は本を読むのが一番の息抜きなのだがそれは置いておくとして。だつて、私のこの国での評判は…。

どちらか片方の手で、机に向かって握りこぶしを握る。」

そうなのである…。クオンさまとレナスさまが毎日後宮に入り浸るせいで、この国ではひとつの噂が流れていった。

国王を誘惑して後宮に誘い込もうとする悪女と、それに心を痛めながらも健気にも心配して後宮へ足を入れる王妃。

実際はクオンさまとレナスさまは殺し合いをしていたわけだけど。

私は世界の行く末が心配で心が痛かった…。

まあ、それは慣れたからいい。誰がどう言おうともう慣れた…。  
ついでに後宮もすこぶる評判が悪い。なるべく出来るだけ、豪華  
にならないようにしてもらつたんだけど、それでも凄い金額がかか  
つていて。あまりに高級すぎて落ち着かないので、私が寝食して  
るのは庭に建ててもらつた地味な一軒家である。  
そんなわけで私の悪評はもっぱら拡大中。国民の皆様の前にでたら  
五体満足で返していただけるか若干、多分に不安な状況なのである。

「ええええ…やだなあー…。」

そりや命までは取られないだろうナビ…。それに今読んでる本が  
いいとこなのだ。

「『』参加いただけますか！ありがとうございます！それでは私は政  
務があるので失礼します！」

「ちょっとまてえええい！だれがそんな返事したああ！」

私の返答内容など完全無視して、カルーアは快い返事をもらつた  
かのように笑顔で言い切り去つて行つた。

あとに残されたのは見た目は綺麗な便箋にしたためられた、一通  
の招待状だった…。

\* \* \*

ひゅるるー。

まだ春でお茶会日和の庭には暖かい日差しが降り注いでいるはず  
なのに、そんな寒風吹きすさぶ音が聞こえる気がする。

田の前にいる貴族のご令嬢方はこちらを見てひそひそと話しこん  
でいる。呼び出したのはあちら側なのだが、よくこの場にこれたな  
という感じだ。

行くつもりが無かつたのに、寝ているうちにドレスを着せられカル  
ーアに転移魔法で後宮の外に放り出された私としては身に染みる

思いだ。

「あの…。」

そう声をかけたら、話し込んでいた一部の少女たちがびくりっと震えた。ガタリと椅子が揺れる音がする。いや、私は悪魔か猛獸か珍獸か何かなのでしょうか。生まれも育つもこれからも善良な一市民なのだ。

巷で流れるあらゆる噂は誤解なのだ。別にクオンさまをたぶらかしてなどいな…いないこともないが、それは私が悪いわけではなく、レナスさまを泣かせ…夢中で本を読んでたら相当無視していたらしく一度本氣で泣かれたがちゃんと謝った。

勝手に座つていいものか迷つていると、3人の少女が立ち上がり私の前にきた。

「ごきげんよう。マリアベルさまへいらっしゃいますか。」

真ん中に立つのは鮮やかな金髪に勝気な朱色の瞳を持つ少女。こちらを恐れるように少女たちとは違い、その笑みには幾分かの余裕がある。しかし、その瞳は笑つて無く、まぎれもない敵意が宿っている。声音にもいくぶんか嫌味な調子が混ざつているが、貴族の中の貴族といった感じのこの少女にはそれもよく似合つている。

たぶんこの集りのリーダー格の少女なのだろう。

その後ろに控える少女たちも彼女よりは地味だが、綺麗な外見をしていて、同じような雰囲気を纏つている。

「はい、そうですけど。」

一方、田舎貴族出身の貴族の端っこに住む私は、なんとも気のない返事しかしようがない。

「よくぞこられましたわね。その勇気に賞賛いたしますわ。」

「はあ、どうも。」

私が噂通りの女狐なら嫌味の応酬でも華々しく繰り広げるところだが、そんなわけないのでそんなことにもならない。

「ところでお名前をおしえて頂きませんか。まだ紹介いただけてないので…。」

私が尋ねると少女たちははつと気づいた様子で顔を真っ赤にした。単純に名前を知らないから聞いただけなのだが、どうやら自己紹介を忘れていたらしい。そしてそれを失態と感じたみたいだ。強気な表情が一瞬崩れかけたが、慌てて取り繕う。

と共にこちらへの警戒心が一層増したようだ…。

「いえ…悪気はなかつたんです…。ごめんなさい…。

「失礼しましたわ。私はベルマ公爵の娘、バリエールと申します。公爵令嬢か」。どおりで貴婦があるわけだ。

「私はシール侯爵の娘、ジェシカよ。」

亞麻色の長い髪を持つ背の高い少女が名乗る。

「私はミナス伯爵の娘、セレナ。」

鮮やかな青い髪をしたショートカットの女の子。ミナス伯爵といえば、高位の神職をいただく貴族でその地位は下手な上位貴族よりも高かつたはずだ。

バリエールさまたちはこちらをビシッと強い眼力で見てくるのだけど…なんというか…そんなにがんばられても…リアクションに困る…。

「えっとお…、よろしくお願ひします。」

とりあえず、ぺこりと頭を下げるぐらいしかできませんよ。

\* \* \*

しーん…。

お茶会の席は初っ端から、沈黙に包まれていた。こちらに対してもビシビシと痛いほどの敵意が伝わってくる。

「お茶がはいりました。」

カタツと侍女さんが私の前にティーカップを置いてくれる。

「ありがとうございます。」

私はお礼を言つて侍女の顔をふと見た瞬間、お茶を拭きだし  
た。

「ふほつ、「」ほつ、「」ほつ。」

何故ならその侍女は、英雄の一人ルシアさんだったからだ。ちなみにルシアさんは男だ。やたら女装が似合っているけど。

「な、なんでルシアさんがこんなとこにいるんですか。しかもその恰好はいつたい…。」

私は背中を撫でてくれるルシアさんに小声で話しかける。王富のお茶会といふことで、配膳は王富の侍女がやるはずだった。だからエルダさんたちはこの場にいない。何人か連れてきていいと言われたが断つた。

逆にその方が厄介になりそうだったから…。

だというのに、何故王富の侍女に紛れ込んでルシアさんがいる。「もしものときはやれと言われました。」

ルシアさんはいつも通りの平坦な声で、それだけ呟くとテーブルのお茶拭いていく。

やれ？ やれってなんだ！？

あ、そうか～。侍女をやれってことか～。  
ってそんなわけない！

今ここでルシアさんが侍女をしなければいけない理由がゼロである。というか、ニコアンス的に明らかにやばいタイプの「やれ」だ。たらりと頬から汗がひと筋流れ落ちる。お嬢さん方のほうを見ると、こちらの出方をまだかがつているようだ。何か仕掛けてくる気配はない。

なんとか…このお茶会を無事にすまさなければ…。王富の庭に作られたお茶会の会場で脇に控えて並ぶ侍女たち、その中でこちらを感情の読めない、しかし隙のない瞳でじっとみているルシアさんを見て私はそう決意する…。

\* \* \*

とりあえずお茶会に私を読んだということは、何か嫌がらせの手

段を用意しているはずだ。

それを避ける術を考えるのもいいが、まずは人間関係の基本、友好を築いてみよう。そう大切なのは話し合い。人間話し合えば分かれ合える。そうすれば、問題も解決どころか、肩身が狭い思いもしなくなつて一挙両得！

「今日はいい天気ですね。」

しかし、出てきたのはなんとも氣のきかない言い回し…。本ばつかり読んでお茶会なんてろくに参加したこと無い私に、お茶会で氣の利いたことを言うスキルなどなかつた…。

「あなたの目は節穴なの？どう見ても曇りですわ。」  
帰つてくる言葉もそつけない。うわあ、確かに曇りだ。雨天中止とかならないかなあ。

「このお茶美味しいですね。」

だが、まだあきらめずに食い下がる。人間つて分かり合える生き物だよね、きっと。

「あら、田舎貴族出身あなたにお茶の味がわかるんですの？」

実は最近クオンさま、レナスさまと一緒に暮らしたせいで舌が肥えてしまつた。香りは最高級のものだとわかるが、それほど感動するほど美味しいとは感じしなかつた。

それはまあ置いておくとして、返しのつづけんどんさが半端ない。どうやら友好を築くのはむずかしそうだつた。うん、わかつていたけどね…。

仕方ない…。相手の罵に氣を付けよ…。やうしな」と、その相手の身が危険な感じがする。さつきまでの私たちのやりとりに、きらーんと何故か目を輝かせているルシアさんに溜息をつく。さて、どういう風に来るだろつか。

バリエールさんたちを観察していると、相手もビリやう準備ができたらしい。にやりと笑つてこちらを見た。

「今日はジェシカが龍姫さまへ、プレゼントを用意したというんです。」

「はい、お近づきのしるしに受け取つていただきたいのですが。」「プレゼント…。いやな予感しかしないんだが…。

「はあ、どんなものでしょ。」

無下に断るものも申し訳なく、一応尋ね返してみる。

「これですわ。」

侍女から何やら箱を受け取り、ジョシカさんはテーブルの上に置く。

彼女の手で蓋が開けられるとグエグエッと不気味な声をあげる大きな魚。ぱくぱくと口を開けて、濁つた白い瞳がジョシカさんの方を向いている。

これは…、エビポアラという魚だ。

大変珍しい魚だが、とっても醜悪な外見の上、陸地でも奇妙な声をあげるのでいまいち食用としては人気がない。

「さあ、どうぞ。」

自分で蓋を開けてみたもののその外見に衝撃を衝撃をつけたらし、ジョシカさんも引きつった顔でそれを私の方にずずずと出そうとする。しかし、エビポアラの白い瞳は相変わらずジョシカさんを見つめている。

「あの…、食べなくて大丈夫ですか?」

「えっ、これ食べられるの?」

嫌がらせのつもりで渡してきたので食べるとも思つてなかつたらしい。というか、食用以外でプレゼントされる魚つていつたい。魚がプレゼントされる時点でおかしいけど。

それよりも、今は大きな問題があつた。

「はやくそれ食べた方がいいですよ。」

私はエビポアラを指差してジョシカさんに遠慮がちに告げる。グエグエつという声はだんだんと小さくなり、白い瞳はより一層ジョシカさんを見つめている。

「な、なんで私が食べなきゃいけませんの…」「なんもの…」

いえ、あなたが用意したプレゼントですし。つてそつでは無くて。

「その魚、食べないと呪われちゃいますよ。」

そう、エビポワラは不気味で食用としては人気が無い魚のだが、一度釣り上げたら絶対食べなければならないのだ。彼らは大自然に暮らす動物たちの真理か心理か、食べられなかつたことを逆恨みし、その相手に呪いをかける。

普通、呪われるのは釣り人なのだが、どうやらうまく逃れたらしい。

「なななな、どういうことですの！？」

「いえ、だつてロックオンされますし。」

田口眼はぎょぎょつとジェシカさんのことを見つめている。どうやら蓋を開けた拍子にロックオンされてしまつたらしい。

このロックオンというのは、エビポワラの濁つた瞳で見つめられていることで、何故か瞳孔もないのにどこを睨んでいるのかわかる。そしてロックオンされた相手は、エビポワラの鳴き声が消えてる前に、それを食べなければいけない。

大抵、生である…。

グエグエツといつこえは、だんだん小さくなつていつている。「わけのわからないことを言って私を齎す氣？」

甲高く叫ぶ彼女に、持ち歩いているミニ辞典を渡してあげる。  
「ほら、ここ。」

本を両手で受け取り、田口を上下にすべらした彼女は、テーブルの上に置いた魚に目を向け「ひいっ」と短く悲鳴をあげた。ロックオンされている状況を理解したらしく。

お茶会のメンバーたちも、侍女さんたちも（ルシアさん以外は）おろおろと騒ぎ出す。ジョシカさんは青い顔をしてがくがくと震えだす。

「あのお、とりあえずさばきましょうか？」

刺身にすれば多少はましになるかもしねないし。多少はだが…。

一応こう見えても、田舎貴族、魚をさばくぐらいならできる。

「いやよーこんなもの食べられないわー！」

しかしジョーシカさんはヒステリックに叫んで拒否する。侍女たちが、なんとか一口だけでもと言いくるめようとしても聞く耳をもたない。

そのうち、グエグエとこう声が小さくなり、そして止まった…。  
しーん…。

お茶会にまた不気味な沈黙が訪れる。  
それを破ったのは。

「くしゃんつ。」

ジョーシカさんのくしゃみだった。

「あれ、これはくしゃんつ！なんでくしゃんつ…くしゃみがどまら

つ」  
ジョーシカさんは凄い勢いでくしゃみをする。

「これは…花粉症の呪い…。」

花と暮らしおと生きる女性貴族たちに恐れられるむつとも恐ろしい呪いだ…。

「そんなん、私がかふんしょ、くしゃんつ、ぶえつ。」

王宮も花壇や薔薇やら花にあふれている。ジョーシカさんのくしゃみはどんどんひどくなつていぐ。鼻水ずるずるで、わざわざまでの美しい貴族の少女の面影はない。

やがてくしゃみと涙でしゃべる」とすらまおならなくなつていぐ。

「こつくしゃん、こんなつくしゃん。」

それでもまだお茶会に留まつとしたジョーシカさんの腕を掴んだものがいた。

「あなたの敗北ですよ、ジョーシカさま。敗者は退場あるのみ。」  
ルシアさんだ。

つてなにやつてんの…? なにいつちやつてんの…? 」

そのまま花粉症になつたジョーシカさんは、ずるずるとお城の中にひきずられていつた。その様子をあつけにとられて見つめていた私に、不穏な呟きが耳にはいる。

「よくもジョーシカを、許しませんわ…。」

バリエールさんだ…。

私がわるいのか!?仲間を失つた一人は、どこか悲壮な顔で私を睨んでくる。

「ジェシカの用意した罠を、そのまま返してしまって、やはり漆黒の女狐。」

誤解である…。断じて誤解である!

いつの間にかお茶会には、以前よりも凄い緊張感が漂っていた。ああ…、世界に平和はいつ訪れるのだろうか…。私は平和を望んだ偉人たちの顔を想いだし、天に祈った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0324o/>

---

寵姫のおしごと

2011年7月5日00時46分発行